
鳳凰学院

神崎 煉夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳳凰学院

【Nコード】

N3458P

【作者名】

神崎 煉夜

【あらすじ】

《異能者》……魔法使いや超能力者など、普通の人が持っていない力を有する者の総称。ほうおう

悠二が春から通う鳳凰学院は、有能な異能者を警察や軍に輩出するための施設である。

入学式が無事？ 終り、悠志の学校生活が始まる。シルヴィアと再開し、クラス委員長の明日香と仲良くなる。だが、悠志の周りに怪しい影が……。

魔法と超能力が織り成す、ファンタジー学園。

登場人物（前書き）

※この小説はフィクションであり、国、団体、個人名などは一切実在する物とは関係ありません。

誤字脱字がありましたら、ご報告の方をよろしくお願いいたします。
感想や評価の方もどうぞよろしくお願いいたします。

登場人物

◆神崎悠二…15歳かんざき ゆうじ

この小説の主人公。鳳凰学園一年生で魔法クラス。昔いろいろあったが、漣たちにはまったく話そうとしない。幼い頃は漣の弟子であり、シルヴィアと一緒に暮らしたことがある。

◆氷見漣…16歳こおりみみお

鳳凰学園の二年生ながら生徒会長を務める優等生。魔法クラスで好奇心旺盛でたまに怖いが、生徒達からは圧倒的に人気である。鳳凰学院の生徒会長に相応しい力も持っている。秘密もあり、悠二とは親密の仲である。

◆氷見雫…15歳こおりみしずく

生徒会長の漣の妹で、悠二と同じ一年生でありクラスメート。いつも明るく悠二を勇気づけるなど、無垢むくな少女。さりげなく優しい悠二に片思いで、いつもくっついて離れない。

◆赤神茜…15歳あかがあかね

悠二と同じ一年生で召喚獣クラス。入学式前に悠二に助けられ、密かに想いを寄せる。しかし、恋愛経験に疎く、自分が好きだと気づいていない。

◆シルヴィア・アルフォート…15歳

悠二と同じ年だが、飛び級しているから漣と同じ二年生。超能力科であり、生徒会副会長を務めている。悠二に合わせたような形で、超能力科ながら魔法科に一年生としても兼任している。

◆冬月美雪…22歳ふゆづき みゆき

悠二たち一年、魔法科の担任教師でまだ新

米教師。実力は確かであるが、おつちよこちよい。よく悠二と話すから禁断の間柄と噂されることも……。当人は否定しているが、定かではない。

◇かんざき かずま神崎和馬…36歳 悠二の父親であり、鳳凰学園の超能力の先生をしている。歳とは似合わず、顔は二十代に見える。先生達に人望があり、生徒からも人気。実力もある。

◇しらかわ ゆき白川由紀…二十歳 鳳凰学園を統括する学園長。外見は十代で若く見え、いろいろと謎の多い人。悠二と何らかの関係と興味を持ち、時折話し掛ける。実力は世界でも屈指の魔法使い。

◇たきがわ あすか滝川明日香…十五歳

悠二のクラス、魔法科の委員長を務めている。雫と中学の時から親友の中で、すぐに悠二と会話をする仲になる。いつも美少女を連れて歩く彼を「不潔」と言うのが癖になりつつある。

第一話 赤毛の少女

そよ吹く風に桜が舞い散り、花びらが髪や肩に落ちていく。制服を着た生徒たちが、緩やかな坂を話しながらゆつくりと登っている。制服は男女共に紺色のブレザーで、左胸に金色の校章を付けている。かんざき ゆうじ神崎悠二もその中の一人であり、退屈そうに歩いていた。ネクタイは曲がっており、黒髪はボサボサでだらしない。

四月一日。

ほうおう

今日は鳳凰学園の入学式で、例外もいるが二年生と三年生はお休みである。そのためまだ制服は新しく、初々しい生徒が大半を占めていた。

「――悠二」

後ろから聞き覚えのある女性の声で悠二は呼び止められた。悠二は振り返り、小走りで向かってくる女性に素っ気なく言い返す。

「なんだよ、みお滯」

間近まできた滯は真っ黒な髪を風に揺らし、なにか強い力が籠った瞳で悠二を見詰めてくる。

「む、むむ……これからは先輩かつ学園の生徒会長なんだから、少しは敬いなさいよね。エッヘン！」

偉そうに答える滯は、制服の紺色のブレザーに灰色のカーディガンを羽織り、腰に手を当てて豊満な胸を張り偉そうに威張っていた。カーデガンの間から赤色のネクタイが覗いている。

ふわりと赤色のチェック柄のスカートが風でなび靡く。

身長は一六七センチありスタイルが良く、黒い瞳と黒髪のポニーテールがよく似合っている。現在は鳳凰学園三年生。

悠二にとって滯は魔法を教えてくれた師匠であり幼馴染みである。これからは鳳凰学園の生徒会長を二年連続務めている先輩になる。基本的に大雑把な性格なのだが学園では人気は高いらしい。らしいというのも昨日で久しぶりの再会を果たした悠二に、滯のお母さ

んが自慢のように話してきたからである。

「はいはい。すみませんでした会長様」

「心が籠ってない！ まったく悠二のバカ」

「はいはい、会長様」

漣は久しぶりに恋人に会ったようなテンションで、ポニーテールを左右に揺らしながら悠二に話しかける。それを悠二は適当にあしらいい、学校に向かって歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ってよ。悠二」

悠二は横目で後ろをチラッと横目で見て、漣がニコニコと笑いながら小走りで追いついてくるのを確認する。漣は悠二の右腕に豊かな胸を押し付け、太陽みたいな明るい笑顔で浮かべ並んで歩く。一般的な身長の悠二は、漣とほとんど差はない。

腕にはプニユと反発する感触があり、四年前から随分と成長していることを、悠二は身をもって実感していた。周りにいた同じ新入生と思われる人たちの視線……特に男性からの視線が突き刺さるように痛いが……。

「そういえば、しずく漣を見かけなかった？」

「漣？ 漣もこの学園に入学するののか？」

「そうよ。あれ、私言わなかったっけ？」

「聞いてない」

漣は意外と昔から大雑把で、何度か悠二を困らせたことがある。そんなところは昔と変わっていない。

「そういえば、漣は引越が忙しくて悠二と会ってないわね。漣もこの鳳凰学園に入学するのよ」

悠二は昨日のうちに氷見家に挨拶を行ったのだが、用事があるとかで漣に会えなかったし、理由もきちんと教えてくれなかった。

「もう、漣姉ちゃん。びっくりさせるから言わないで、って言ったのに！」

黒髪を紫色のヒモで括ったツインテールの少女が、坂を上っていく悠二たちの前に仁王立ちしていた。少女は目を吊り上げ、漣を睨

んでいた。

「久しぶりだな、雫」

「悠兄ちゃん久しぶり」

悠二が声を掛けてあげると、雫は数年前と変わらない純粹な笑顔で悠二を見詰める。雫は嬉しそうにテクテクと悠二に歩み寄って、滯に劣った胸を左腕に押し付けてきた。見た感じでまったくなくないように見えたが、女の子らしい柔らかい感触がきちんとある。

「ちよつと雫、何しているのよ！」

「気にしない気にしない」

少し顔が赤い悠二、眉を寄せる滯、嬉しそうにはしゃぐ雫の三人は昔話をしながら鳳凰学園ほうおうに向かった。

「――さて、とりあえず校内に入ったのはいいが……騒がしいな」
悠二は目の前の出来事を他人事のように呟く。横にいる滯は嫌そうな顔をしていて、反対側の雫は無言で立ち尽くす。

校門をくぐり抜けると、無駄に広い広間が広がっていた。広間は木や花で華やかに飾られていて、その雰囲気はどこかヨーロッパの風景に近い。校庭の正面――と言っても百メートルくらい先だが、国会議事堂みたいな白い建物（教職員棟）が建っている。校庭の広さも驚いたが、その建物の大きさにも驚かされた。

普段は憩いの場所としての広間が、今では左に魔法使い、右に超能力者と沢山の人で広間は溢れかえっていた。学年によって制服の胸にある名札の色が違い、今年の一年（新入生）は青色、二年は緑色、三年は赤色となっていて一目瞭然である。これは年によって変わる。

双方が別れていた理由は簡単に予想できた……お互いを罵りあっているからだ。悠二達の所まで罵倒が轟いている。

「まったく騒がしい奴らだな」

「しょうがないよ……もともと魔法使いと超能力者は、昔から仲が悪いから」

「それにしてもな」

「どうしてもライバル視してしまうんじゃない？ 二年や三年にもまだ反感する人はいるからね」

魔法使いの人達をまとめる組織が『魔法協会』。超能力者の人達をまとめる組織が『超能力協会』。二つの勢力は昔からライバル関係にある。理由は自分達の方がより有能で強いと言い張っているからだ。

校門から光景を眺めていた悠二はため息を吐く。

「漣姉ちゃん、なんとかしないでいいの？」

ため息を吐く悠二を余所に、心配そうな顔で雫は漣に問い掛ける。
「毎年あることだから大丈夫でしょう」

「生徒会長なのだろ、何とかしたらどうだ？」

「もう、意地悪。大丈夫だって。それより、私が教室まで案内してあげるよ」

パアーンと、乾いたような銃声が広間のざわつきを一蹴する。広間は時間が止まったように、ざわついていた人達がしんと静まり返る。いきなりの事で悠二達も状況が読めずにボー然としていた。

しかし、静まり返った広間はすぐに騒がしくなる。

「「キヤー」」

「この野郎、やりやがったな！ 許さん！」

「何を言っている！ こちらは何もしてないぞ！」

目の前の状況が一気に変わった。

広間では女子生徒の悲鳴や男子生徒の怒号が飛び交う。

——その原因は唐突な一発の銃撃。だが、ピリピリした状況を変えるには十分過ぎた。

突然のため何処から飛んで来たのか悠二はもちろん、漣達もわからなかった。ただ変に空白になった場所で突然と少女が倒れてしまう。右胸から大量の血が地に飛び散り垂れ流す。その現状だけで、先程

の銃弾で被弾したのがわかった。

しかし最悪な事に、その銃弾を超能力者が撃ってきたものと、魔法使いは思ってしまったのだろう。冷静に考えれば違うことは明らかなのに……。

「くっ、やっちゃまえ!」

「くそっ、やらなければやられる」

一人の魔法使いの一言と、超能力者の一言で広間の混乱は伝染する。魔法使いと超能力者によって、魔法や超能力を使って喧嘩が始まった。二人の喧嘩が喧嘩を呼び、広間は混戦に陥ってしまう。

「『炎の（フレイム）矢』^{アロー}」

「くっ……」

魔法の矢が飛び、^{サイコキネシス}念動力で対抗をしている。あらゆる所で派手な喧嘩が始まっていく。

それはもはや、小規模の戦争だった。

「漑! さっきの銃弾で怪我をした生徒を、早く治療をしてやらないと巻き込まれて危ないぞ!」

空白の場所で銃弾によって負傷した少女は、右胸を手で押さえて呻いている。その表情はとても生々しく痛そうだ。

その場は少女の出血により、すでに血溜まりができている。

「どこなの!」

「あそこだ!」

漑は広間が混雑していてまだ見つけられてないのだろう、焦った声で悠二に問い掛けてきた。悠二は負傷した少女を指差そうとしたが、慌てて疾走する。

彼女に誰が放った魔法の矢かわからないが、少女のすぐそばに着弾する。

「チィ、邪魔だ! 雫は先生を呼んで……」

「無駄よ。先生は生徒の争いには——参加出来ないのよ。雫はそこで障壁を張ってなさい」

悠二の言葉は、いつの間にか隣にいた漑の冷静な叱声に掻き消さ

れていた。

「なんでだ？」

悠二は漣に強い口調で聞き返した。疾走しながら右方向からきた魔法の矢を、悠二は身を翻して避けて、放った男に対して廻し蹴りを逆にお見舞いする。男は腹を抱え、その場でうずくまる。

「バランスを——均衡を崩したくないのよ、お互いにね」

漣は周りとは違い、冷静で冷たい声で言ってきた。

「でも、騒ぎに気が付いた生徒会と執行部がすぐに来てくれるわ！」

撃たれた少女は痛みによって、うまく障壁を張れないらしい。

その場所で障壁なしの丸腰では危ない。

魔法の矢は下級魔法だが、それでも生身で受ければかすり傷ではすまない。皮肉にも、少女に向かっていく魔法の矢があった。

それを見た悠二は、すぐさま人差し指を彼女に向け、意識を集中させて障壁を張った。

「くっ、アンチ・マジック・シールド『対魔法障壁』」

悠二はなんとか紙一重のタイミングで対魔法障壁を張り、少女に向かった魔法の矢を弾いた。

さすがの悠二も肝を冷やし、冷や汗を掻いた。

「ふう」

悠二から少女まで三メートルくらいだが、周りでは呪文を唱える者や、超能力を使う者が到る所にいるのだから、なかなか進めないはずだ。しかし、その場を悠二は軽々とすべての攻撃を受け流し、近くにいたやつを気絶させながら彼女の元を急いだ。

「くそっ、魔法を使うしかないか……漣、あとは頼む！ 治癒魔法は得意じゃないから、俺は争いを止める」

「わかったわ。こっちは任せて」

悠二は少女の所まで着くなり漣に言い放つ。

体の中にある魔力を引き出す。魔力が体から溢れ出し、悠二の周りが青色に光り輝き始める。

「我^{われ}に天からの雷の力を……我を守りし眩しき稲妻、闇を光り照らす閃光、大地を震え揺らす雷鳴、長く降り続く雷の雨——」
人差し指を天に指し、悠二の独自魔法^{オリジナル}を発動させる。

「『雷^{らい}天・五月雨^{さみだれ}』」

空に数十の魔方阵が現れ、そこから雷が落ちていく。

ドーンと、雷の魔法は耳鳴りがするくらいの轟音を発した。ゆうに百くらい小さい雷が落ちた後、魔法がやっと終わった。時間的には十秒くらいだったが、受ける側の人には長く感じただろう。魔法を行使した悠二でも、百を優に超える雷すべてのコントロー^ルはまだできない。そのため何人か落雷をもろに当たり、痺れて倒れている人もいる。

自業自得である。

悠二の魔法によって、広間にいた人はボー然と突っ立っていたりして、広間は静けさを取り戻した。

「執行部だ！ 今から魔法および超能力を使った者は厳罰に処罰す。けが人以外は邪魔だから教室に行け」

どうやら執行部が来たらしく、慣れているのか手際良く騒ぎを収めていく。蜘蛛の子を散らすよう人が消えていく。

悠二は事情を話すのが面倒なのだろう、（先ほどの魔法の使用後）すぐに雫の元に向かっていた。

「ただいま」

雫は滞に言われた通りにさっきの場所にいた。

「お帰り。さっきの魔法凄かったよ。今度教えて」

——さっきの悠二が使った魔法は、悠二の独自魔法（別名オリジナル魔法とも呼ぶ）。独自魔法はそのままの意味で、自分が考えた魔法のことだ。魔法使いは独自魔法の一つは持っているものであり、鳳凰学園では三年生から考えて作る。

例外を除き普通の一年生には使えない品物であり、悠二の独自魔

法はそこそこ完成されていた。

「嫌だね」

独自魔法は必殺技なので、いかに近い間柄でも教えてはいけない。

「意地悪……。それより、あの子は大丈夫なの？」

「漣に任せたから大丈夫だろう」

悠二は漣の魔法使いとしての実力を認めているし、治癒魔法も得意にしているから大丈夫だろう。そっと悠二が少女の場所を確認すると、膝について治癒魔法を掛けている漣の姿が見えた。

「お姉ちゃんがいるなら、大丈夫だねえ」

姉の実力を信じている雫は、安堵したように小さく吐息を吐いた。「雫、さっさとこの場から撤収するぞ。ほら、早くしないと置いていくぞ」

「待ってよお。悠兄ちゃん」

歩きだした悠二の後ろを、雫は親鳥を追う雛鳥ひなどりのように、ちょこちょこつついて歩く。悠二はそれをチラッと振り返り、雫が追い付くのを待ってから、魔法校舎に向かって一緒に並んで歩いて行く。

——鳳凰学院は二つの校舎によって成り立っている。

一つは、魔法使いが通う魔法科校舎。

一つは、超能力者が通う超能力科校舎。

鳳凰学園の名前の由縁は、鳳凰は鳳ほうと凰おうの二羽で鳳凰と言うらしい。簡単に言えば、魔法と超能力の二つの学校ということで鳳凰学園になったらしい。大層な名前だが、それ相応で学園の敷地は広い。特に有名なのは……学園のある場所だ。

鳳凰学院は東京湾から南に約1、5キロ離れたところにある。

島（人工島）の直径は10キロ。中央には山があり、北側が港、南側が街、東が魔法科校舎と魔法科の寮、西が超能力科校舎と超能力者の寮となっている。

鳳凰学園は全寮制で、生徒のほとんどの人はこの島に五年間滞在することになる。街に出れば、いろいろと生活に必要なものも売っ

ているので、遊びに行くこと以外に島から出ることはない。一応、東京に直行便が一日に八便ほど出ている。

「パンフレットに書いていた通り、中々楽しそうだね」

「……そうだな」

楽しそう言う雫に対して、悠二は細目で空を見て呟くように言った。その時、悠二は誰かに見られているような気がしていた。

第二話 入学式（前編）

あのあと悠二と雫は何もなかったように魔法校舎に入り、自分達の教室に向かっていた。

「悠兄ちゃんのクラスは？」

「俺か？ 俺は……魔法クラスだ」

「さすが悠兄ちゃん、私も魔法クラスだよ。同じクラスか……嬉しいなあ」

雫が嬉しそうに、一人でキャピキャピ騒いでいた。

鳳凰学園のクラス分けは、自分の専門によって実技などが変わるため、基本的には入試の時に書いた専門のクラスになるようになっていた。入学試験で実技もあり、その結果で変わった者もいるそうだ。

悠二の魔法科には魔法剣士クラス、魔法クラス、治癒クラス、結界クラス、召喚獣クラスが存在している。剣士魔法クラスが一番人数は多いが、男ばかりでむさ苦しいらしい。

「魔法クラスはどっちだ？」

「確か……こっちだったと思うよ」

廊下を通り、なんとか目的の魔法クラスの教室に着くことができた。

悠二のクラス——魔法クラスには五人程すでに椅子に座っていた。全員で四十人くらいか、椅子の数で悠二は確認する。この確認は悠二にとって癖みたいなものだ。

「少ないな」

つい悠二は呟いてしまっていた。それが聞こえたのか、雫が答えてくれる。

「男の人の殆どは魔法剣士クラスだからね。女の子が多いからって遊んだら駄目だよ。席は好きな所でいいらしいよ」

「そうなのか？ そうだな……やっぱり窓側の一番後ろの席だな」悠二は一番後ろの席に向かった。それをトコトコと雫が付いている。悠二が席に着くと雫は、さも当然のように悠二の隣の席に着いた。

「別にもっと安全な場所でも良いんだぞ」

窓側の外は運動場（別名、闘技場）だ。そのため良く魔法が飛んでくるらしい。雫が言っていたし、現に怪我をしたやつがいるらしい。

よっぽどの物好きかバカしか、好んでこの窓側には座らない。他に来ていた人は全員廊下側だった。

「私は悠兄ちゃんの隣が良いのだよ。それに悠兄ちゃんが居たら方が安全だしね」

「ああ、そうかい」

悠二は机に事前に買っていた教科書を入れていく。

とりあえず、時間が来るまで寝よう。これからの睡眠の友（だだの机）に突っ伏す。明日にでもマイ枕でも持って来ようか。

何やら周りが五月蠅く、悠二は起きて顔を上げる。

「――なんだあ？」

悠二は目を擦りながら原因を探した。その原因は……生徒会長のと濡だった。

「これは生徒会長様！ 何か私たちに御用でも？」

「キヤー、カッコイイ」

「き、綺麗な人……」

まあ人それぞれの反応をしていたが、悠二の寝ている間に席が埋まっていたようで、机に荷物が置かれている。空席が少しあるのは

先程の悠二の魔法のせいでもあるだが、そんなことは悠二が知るはずがない。

「意外と人気なのだな」

昔に一緒に住んでいたが、そのころより綺麗だと思うのだから当たり前か……。モデル並みのスタイルを持つ漣を、初めて見た一年生の反応は有名人にあったような騒ぎ方だ。

「ありがとうみんな、ちょっと用事があるから通してね」

ドアの人だかりを通り抜けた漣は辺りを見渡していた。

わざわざ可愛らしく指を頬に当て首を傾げなくても……。まあ、どうせ俺を探しているのだろう。

「どうしたんだ、漣？」

悠二は漣に声を掛ける。その声で悠二に気付いた漣は、発見とばかりに指差してくる。漣はニコニコと笑顔で悠二まで駆け寄ってきた。

「悠二」

その声を聞いた魔法クラスの数少ない男と、教室を囲んでいる男は殺気……。女子はこそそと小話を始める。

「何？ 会長様とどんな関係」とか悠二は聞こえたが無視した。

「なんか用か？」

「どうかしたの？ 漣姉ちゃん」

隣の席に座る雫も立ち上がって近寄って来る。

「一葉報告に来たのよ。助けたあの少女は無事よ。あつ、でも危なかったのだけだね」

「そうかよかった。でもそれだけじゃないだろう？ 何かあったのか？」

悠二は少女の安否を聞き、とりあえず安心した。

でも、それだけなら後でもいいだろう。違う何か本命があるだろうと、悠二はそう読んだのだ。

「うん。私があとで発見したんだけど」

漣はカーディガンの胸ポケットを探り、それを取り出した。

「これは微かだが魔法？ いや、超能力でもない妙な力が籠っている気がする……な」

「そうなの、よくわからない力が籠っているのよ」
弾丸を取り出した漣は、悠二の机の上にそっと置いた。悠二達以外には聞こえないように小さい声で話す。

「でも……これはなんででしょうか？」

雫は疑問を投げかける。魔法使いは魔力の流れがある程度わかり、魔力の残滓ざんしも感じることができる。

「そうよね。私は初めて感じる力ね」

「俺は……知らないな」

悠二はどこか曖昧に答える。

「それと……助けた人に聞いたのだけど、危なそうな雰囲気が出ていたから、銃弾に当たる前から『対物障壁』アンチ・ブロック・シールドは張っていたらしいの。いわゆる障壁を貫通、いや通り抜けたらしいの」

「……！」

「……」

雫は弾丸が対物障壁を通り抜けたことに驚いていた。普通は有り得ないことだからだ。

「話しはこれだけだから。あ、他の人には内緒にしてね。騒ぎになると面倒だから。とりあえず、学園長に話して来るわ」

弾丸を元のポケットに入れ、漣は教室を出て行った。

「……悠兄ちゃん？」

「……」

雫が心配そうに悠二を見ていたが、悠二は窓から空を眺めていて気が付かなかった。

「確か悠二と呼ばれていたな」

「ああ、俺になんか用か？」

悠二は快晴の空を眺めながら、答える。声を聞かぎり悠二は男であることを気づく。隣に立っていた雫が困惑した顔をしていた。なぜなら、手を悠二に向け殺気を出していたからだ。

誰だか知らないが、なかなかの魔力を溜めていた。

「会長のことを呼び捨てし、仲良さそうだったな。会長とはどんな関係だ？」

周りの視線がこちらに向く。それでも俺は空を眺めながら呟く。

「――幼なじみ」

「なるほど、だが実力の方はどうか……な？」

いきなり男は悪者のような顔になり、ニヤツと笑った。

「やめなて、悠兄ちゃんに手を挙げる人は私が許さないよ！」

隣に立って見ていた雫が強い口調で割り込んできた。そのため、

悠二は話し掛けた男を初めて見た。 「なんだよ、お前はこいつの妹か？」

「い、妹？」

雫はなぜだか照れたような素振りをしはじめた。

「い、妹じゃあないよ！ あつても、い、妹でもいいかも……しれないけど」

雫は顔を真っ赤にしていた。たぶん何かしらんが妄想でも始まったのだろう。横で「キャー……うふふ」などと言う声が聞こえる。

周りの奴らはドン引きしていた。

「なんだ、お前？ 頭は大丈夫か？」

「雫を馬鹿にするな、あとでお前大変な目に遭うぞ」

一応忠告はしてやった。

「ふふふ、貴様は三年生の剣士魔法クラスの俺に挑発か？」

「……」

「わかったら会長から離れよ」

悠二の沈黙に、男は調子に乗ったような顔をしていた。周りの人は廊下側まで下がっていく。

「三年生か、試してみるか？」

悠二は実力のない奴がでしゃばる奴が嫌いだった。結局、強いな
いと何も出来ないから……。

「言ったな『炎の榴弾』」
ファイヤー・ボール

男は無詠唱で悠二に魔法を放つ。

超至近距離からの下級炎系魔法だ。受けたら怪我では済まない。

しかし悠二はきちんと反応していた。瞬間的に体に魔力を溜めて『身体強化』を使い、下にしゃがみ込み避ける。

三年生の魔法は窓側の壁に当たり、大爆発した。結界によって壁には傷一つ付かなかったが、窓ガラスが割れる。

男は勝ち誇った顔をしていたが、急に眼前に現れた悠二にボー然突っ立つ。

「実力もないのに、喧嘩を売るな」

悠二は男の腹に力一杯に殴った。腹を押さえながら男は倒れた。これを見ていた周りの奴らが歓声を上げた。

「年上を倒しちゃうなんて、ちよつと、カッコイイかも」と、さつきとは違い歓迎ムードに包まれた。「そんなに凄いことじゃない」

悠二はそういい、爆風によって倒れた椅子を立て直し座った。窓は粉々になっているが、こいつが悪いから大丈夫だろう。

「雫、大丈夫か？」

「うん。当たり前だよ」

近くにいた雫は、男の魔法と同時に対魔法障壁を張っていたから無傷だった。雫は風系統魔法で周りの机と椅子を立て直し、ガラスを片付けてくれる。

「ありがとう、雫」

「いいよ、悠二兄ちゃんが悪くないしね。滯お姉ちゃんには私から弁護してあげるよ」

「雫、こいつどうしよういか？」

「先生が来るまで置いていたら」

悠二は男を指差し雫に聞いた。雫は「こいつ奴なんかほつといた方がいいのよ」見たいな目で一度男を見下す。悠二に向くときにはすでにいつもの笑顔だった。つくづく女は怖いなと悠二は再確認する。

「入学いきなり大変だな……まあ楽しくていいか」

「皆さん、元気ですか？ ひゃん。どうしたのですかあ？ 誰ですか！ 人殺しをした人は……その貴方ね！」

いきなり入ってきた先生らしき人にビシッと悠二を指差しされる。確かに合っているのだが、いきなり人の事を人殺しって言うか普通。これは間違いなく、重度の妄想癖か推理癖だな。

「先生の鉄槌ですう」

いきなり悠二にビンタをしようと駆け寄って来る。言っちゃ悪いが走るのが遅く、小学生の駆けっこ並だった。

「鉄槌ですう。あれえ？」

悠二は立ち上がり、普通に避けようとした。しかし、自称先生は悠二の目の前でこける。

「きゃー」

避けようと思ったら避けられるけど避けたらな。ため息を吐きつつ、悠二は受け止めることにした。

「……」

「……」

雫の視線が痛い。

「きゃー、人殺しの次は痴漢ですかあ。まったく先生怒りましたよおーぶんぶん」

なんなのだよ？ この先生……マジで先生かよ。

悠二と先生の体勢は、悠二は先生に馬乗りされている。先程雫が片付け置いておいたガラスの前にこけた。こける寸前で悠二は体を滑り込み、先生の下敷きになったのだ。

まずいだろと内心想ったが、さらに悠二は先生の行動で肝を潰した。

「痴漢な生徒には鉄槌ですう。『炎の剣』」

フレイム・ソード

先生は悠二に向かって炎で出来た一メートルほどの剣を出すなり、切りかかってくる。

振り下ろされた剣は

「おいおい、冬月先生」

スーツを着た男が女先生の手を掴んで止めていた。

「いきなり、俺の息子を殺す気ですか？」

「ひゃ……神崎先生」

驚いたような声をだして冬月と呼ばれた先生は固まる。

「久しぶりだな、悠二」

「久しぶり、親父」

神崎先生こと悠二の親父、神崎和馬かんざき かずまは優しそうな顔で、声も落ち着いた声で悠二に話し掛ける。

和馬は超能力者でこの鳳凰学園の超能力の教師をしている。和馬の外見は実年齢の三十代後半に見えない、せいぜい二十代前半に見えるだろう。

「え、あ……ええ！」

冬月は意味がわからないような顔をして困惑している。冬月は二十代らしく若い。肌は雪みたいにく白く、髪の毛は茶髪でストレートだった。顔立ちもよく、綺麗な顔をしていた。

「……変態」

悠二がじっと冬月を観察していたせいか、悠二の後ろに立った雫にぼそつと言われる。その言葉は悠二には聞こえなかったが……。

「あの先生、そろそろどいて下さい」

「え、あ、ごめんなさい」

冬月はパツと立ち上がる。

「まったく、悠二は女癖悪いな。ワツハハハ」

「見ていたくせに……」

「え、え？」

「見ていたなら早く止めろよな」

「悪い、面白くなりそうだったからな」

は三十代後半に見えないのだよ。せいぜい二十代前半に見える。

「え、あのでも人殺しは……」

「だから、死んでないって。気絶しているだけ。それに俺は襲われた身だ」

クラスメイトが頷いてくれたお陰で、なんとか冬月は信じてくれ

た。

「あ、あのいろいろとごめんなさいね。まだ新人でして……」

「構わないよ。とりあえずこいつのことはよろしくな」

「構わないって、俺の言葉じゃないか？」

「ワツハハハ、じゃあ悠二、またな」

「じゃあな、親父」

なぜか和馬は、見た目とは裏腹に笑い方だけはオッサンだった。

あの後、気絶した三年生は冬月の転移魔法で保健室に運ばれていた。
った。

「ごほん、初めまして。この度このクラスの担任になりました冬月美雪つぎみゆきです。これから一年間よろしく願いしますね。さっきは取り乱してすみません」と自己紹介を終えた冬月先生は一人一人に自己紹介をさせた。

意外と根に持つタイプらしく、悠二の番にまた謝ってきた。

「えっと、あと少しで入学式ですから体育館に行ってください。

えっと、これでホームルームは終わりです」

ホームルームを終えた冬月先生は緊張していたのか、ため息を吐き退室して行った。

「いい加減機嫌を直したらどうだ、雫？」

「……」

あれから雫はこの調子だ。自己紹介でも必要最低限しか話してなかった。

「悠兄ちゃんのバカ」

「はあ、雫」

悠二は雫の頭を撫でてあげた。雫は顔を赤めてそっぽを向いた。

「もう、悠兄ちゃんのバカ……」

「そろそろ、体育館に向かう雫」

撫でるのを止めて、悠二は席を立った。雫はちよっと名残惜しい顔をしたが「うん」と、元気よく答えてくれた。

どうやら機嫌を直してくれたらしい。

だいたいなので機嫌が悪かったのだろうか？　もしかして、先生に馬乗りされたからか？　悠二と雫の二人は、体育館に向かった。

第三話 入学式（中篇）

体育館は魔法校舎と超能力校舎に一つずつある。

入学式は別々に行うため、魔法科の体育館に向かっていた。

「それにしても……大きいな」

「え、何が？」

「いや」

悠二はある一点だけを見ていた。それに気付いたのか、雫は悠二が見ていた周囲を見回す。

「悠兄ちゃんの変態」

「はあ、いや」

雫の呆れたような目線が痛い。多分勘違いをしているのだろう。

「違うぞ！ 体育館のことだぞ。普通の倍はあるだろう」

目の前の体育館を指差す。

「鼻の下が伸びている！ 変態」

「だから違うって、あれ？ あの子は……」

悠二は体育館の前でキョロキョロ見回す女の子を見つけた。その女の子は、今朝漣が助けてあげた子だった。

「どうしたの？ 悠兄ちゃん？ 怒っちゃったあ？」

「違う、今日助けてあげた子がいたからさ」

雫がキョロキョロと捜しはじめたから、悠二が特長を言ってあげるとすぐにわかったらしい。まあ、特長がありすぎる子だったからな。

まず髪の毛が赤髪で短めのポニーテール、身長は中学生くらい。だいたいまず赤髪だけでわかるだろう。目立っていたからな、いや浮いているのか。

「あの子をお姉ちゃんがね。可愛い子だね……でも、悠兄ちゃんが助けたことは知らないのでしょうか？」

あのことは、体育館に来る前に全部話していた。

「知らないだろう、顔も見られていないし」

悠二は少女を無視し、通り過ぎようとしていた。

「あの、すみません」

その女の子を通り過ぎようとした時、予想外に悠二は声を掛けられた。

女の子の声は少し緊張してか、少し震えていた。

「はい？ 何でしょうか？」

「えっと……その……」

ハッキリとしない子だな。

「どうしたの？」

雫の優しい言葉で少しは落ち着いたのか、話しはじめた。

「悠二さんですか？」

「そうだが、なぜ名前を？」

「あつ、生徒会長さんに助けて頂いたことをお聞きしまして」

濡の奴また面倒な事を……。だが、なぜ顔まで知られている？ それを察したのか女の子がそのことを話し出した。

「生徒会長さんに写真を見せて頂いたので、すぐに見つけられました」

「写真？」

「はい、生徒手帳に大切に挟んでいましたけど、失礼ですが付き合っているのですか？ あの、生徒会長さんと……」

確かに失礼だな、初対面に聞く事じゃないな。だいたいなので濡は写真なんかを持ち歩いているのだろうか？

「……」

あれ？ 雫も生徒手帳に悠二の写真を、いかにも普通だろ的な感じで挟んでいた。

「あの！ 遅くなりましたが、今日は助けてありがとうございました
す」

「いや気にしないでいい。ところで君の名前は？」

「あつ、あかがみあかね赤神茜です」

「どこクラス？」

「えっと、召喚獣クラスです」

召喚獣を扱える人は少なく貴重な存在だ。

「あの、貴女は？」

「私は氷見雫だよ。滯の妹で、ちなみに魔法クラス」

「早く体育館に入ろう。入学式の時間だしな」

体育館の前には沢山の人で溢れていた。東京ドームに似た体育館は、本来は闘技場として使われているらしい。体育館と呼ぶのは、聞こえを良くするためだろう。

「また人混みか……」

人混みが好きではない悠二にとっては憂鬱な気分になる。

「……」

何かしら雫の視線が痛く、怒っているように感じる。雫は悠二に對してそっぽを向く。

「雫？　もしかして、相手してあげてないから怒っているのか？」

「……」

うんうんと雫は頷き、頬を膨らます。

「はあ、ちょっとだけだろ。そんなに怒るなって」

「……」

雫はやけに頭を気にしているようで、頻りに手で髪の毛を解いていた。

たぶん「頭を撫でてくれたら許す」ってことだろうな。

悠二は雫の頭を優しく撫でてあげた。効果は抜群で雫は嬉しそうに微笑み、ニッコリと笑う。それが可愛いこと可愛いこと。妹がいたらこんなだったろうなと思うてしまう。

「悠兄ちゃん？」

悠二は空を見詰め、いつの間にかその手は止まっていた。雫が心配したように、問い掛けてくる。

「何でもない。早く中に入るか」

最後に悠二は雫の髪をくしゃくしゃに撫でてあげた。雫は嬉しそ

うに笑い出す。やっぱり、雫には笑顔が一番似合う。茜から意味深な瞳で見られていたが、気にしなくていいだろう。

体育館の前には仮設テントがあり、机には受付と書いてある紙が貼られていた。受付には黒と金髪の女性が立っていた。

「お名前とクラスを教えてください」

黒髪の落ち着いた二十代だろうと思われる女性に聞かれる。

「神崎悠二、魔法クラスです」

「神崎悠二さんですね。えっと、24番の席に座って下さい」

悠二は新入生案内書を黒髪の女性から受け取り、雫と茜も受け取るのを待つことにした。

そわそわしているもう一人の金髪少女が気になり、悠二がそちらを向くと少女はそっぽ向いてしまった。少女はどこか落ち着きがなく、悠二が見詰めていると顔が赤くなっていく。

少女は碧眼で長い金髪を腰まで垂らし、黒色のスーツ姿で立っていた。碧眼に金髪でヨーロッパの出身だとわかる。鳳凰学園は国籍を問わない日本唯一の学園だから不思議ではない。

少女の顔を見る限り歳は同じくらいだろう。だからか、すごくスーツが似合っていない。

金髪の少女は悠二をチラチラと見て様子を覗いていた。どこか期待めいた瞳をしている。

「悠兄ちゃん、悠兄ちゃんってば」

いつの間にか雫達も受付を終えていて、悠二を呼んでいた。金髪の少女に気を取られすぎて気が付かなかったのだろう。

「悪い、じゃあ体育館に入ろうか」

悠二は少女から目を離し、雫に向き直り言った。雫は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに笑顔になり悠二を急かす。悠二の腕に手を廻し、雫は自慢げに話し出した。

「うん。それよりも気付いた？私と悠兄ちゃんの席は前後なのだよ」

悠二達が体育館に入るまで、悠二は少女の殺気と嫉妬みたいな視線を背中に感じていた。なぜか振り向いてはいけない気がしたから、悠二は振り返らなかったが……。後から考えてみると少女を見たことのあるような気がした。そのことに深く考えなかったことを、悠二は後から後悔することになるとは夢にも思わなかった。

体育館は外見以上に広く、真ん中に広い石畳があり、周りは観客席が覆っている。まさに闘技場であり、体育館には全く見えなかった。

「本当に学校かよ」

悠二はつい小言を呟いてしまった。普通の学校にこんな設備なんてあるわけがなく、今更ながらこの学園の異常さが身に染みる。

「こんなところに入學……この学園はいろいろと規格外なのですね」

茜の言いたい事は痛いほどわかる。四月なのにこの体育館は寒くなく、むしろ快適な室温だった。

この体育館には魔法具（業物）がそこら辺にあり、室内を調整されている。

「こんなところに入學式するのか、なんか嫌だな」

「私も嫌になってきました」

雫と茜は溜め息を漏らしながら俯く。石畳の真ん中には椅子はなく、新入生と思われる人達が固まっていた。嫌な予感しかない……。

「止まっても仕方がないか、行きたくないが行こうか」

悠二達は嫌々石畳に上がり、石畳の真ん中まで歩いて行く。

「皆さん初めまして、鳳凰学園の学園長を務めています白川由紀しらかわ ゆきと申します」

唐突に優しい綺麗な声が聞こえてきた。マイクは使われている様

子はなく、それでも広い体育館に響いていた。

声がした正面観客席に新入生が注目する。

自称学園長は黒色のスーツに猫耳おもちゃという意味不明な格好をしていた。学園長は若く、悠二達と同じ年くらいだろう。栗色の髪の毛は腰まで伸ばし、肌は雪のように白く透き通っている。

「栗色の髪に猫耳……意外といける」

「学園長？ あんな意味不明な格好をした人が？」

少女のようにクスツと笑う学園長の顔は、可愛く見惚れてしまう。

「さて、新入生の皆さん入学おめでとうございます。学園長として歓迎をしたいと思います」

何か悪巧みをしているような表情を滲ませ、学院長は一度手を叩く。

転移魔法か魔法陣を使ったのだろう。スーツ姿の40人くらいの先生達が一瞬で現れ、二階の観覧席からは、30人くらいの上級生と思われる人達が扉から入って来る。

新入生達は意味がわからず、困惑しているようだ。悠二は先頭に立っていた滯を見つけ、たぶん生徒会と執行部だろうと予想できた。滯は黒髪を靡かせながら、悪い事をするような顔をしていた。

悠二は非常に悪い予感がしていた。なぜなら、滯達は杖やら魔法書で完全に武装しているからだ。

「私は鳳凰学園の生徒会長の氷見滯。よろしく……そしておやすみなさい」

滯は学園長に頭を下げ、悠二達を見下しながら言い放つ。誰もが「おやすみ」とはどういう意味かを感じ取れた。武装した上級生がいきなり呪文を唱え、石畳に跳躍してきた。今から戦闘を始めるようだ。

「くすっ、新入生の皆さん。十分ほど生き延びてくださいね。ちなみに三分は耐えて貰わないと退学もありますから」

学園長は楽しそうに口に手を当て、脅迫じみた言葉を言い出す。言い換えれば、これは最終試験なのだろう。

「……」

悠二は無言の非難を漑に向ける。漑はずっと悠二を見ていたらしく、目が合うと笑いながら手を振ってきた。

「……漑のやつ楽しそうだな」

すでに周りでは、上級生と新入生が戦闘を開始していた。

「《悠ちや……悠二さんですね？あなたのことは漑さんや和馬から話を伺っています》」

悠二は頭に直接響くような声がし、悠二を学園長が見詰めているのに気付く。

「念話ですか」
テレビ

念話で話し掛けられていることに、体験したことがある悠二はすぐに理解した。

「《ふふつ、あなたには期待していますよ。漑さんの……ですし……私の》」

バッカーン。

悠二の近くで爆音が響く。

「漑のなんだった？」

悠二は周りを気にせずに学園長に問い掛けが、返事は返ってこなかった。変わりに漑が跳躍して石畳に着地する。漑は悠二を明らかに狙っていた。

「めんどくさ。逃げようかな」

悠二は溜め息を吐き、隣で障壁をつかって守ってくれていた雫を見やる。表情は特に何も変わってなく、雫は悠二を見上げていた。

「逃げ出したいです」

雫の隣では病み上がりの茜が怯えている。

「あと、八分くらいか。漑からは逃げられないし、やるしかないか」

若干憂鬱に感じながらも、覚悟を決めるしかなかった。

「雫、茜。闘いますか」

悠二は二人に振り返り、キッパリと言い切る。

「わかった。悠兄ちゃんが言うなら私は頑張るよ」

雫は一瞬の迷いもなく言い返してきた。

「あの、私は……その」

自分が役に立てないことを感じてか、茜は躊躇っているようだ。

「茜は俺が守ってやるから、大丈夫だよ。可愛い顔に傷付けたくないし」

優しく茜の頭を撫でてあげ、悠二は言い伝える。茜は顔を真っ赤にししながら、コクコクと頷いた。

「……」

雫の何やら嫉妬めいた目をしていたが、気にしないことにしよう。十メートル先の雫がこちらに向かって来ている。魔法が飛び交う道を何気なく歩いていた。散歩でもしているような容易さで、うっすら微笑みながら悠二から目を離さない。

正直、かなり不気味で怖い。

「雫、雫はどうしよう？」

好戦的な雫は相対したくない。昔、魔法を教えて貰っている時の事が不意に思い出す。

「お、お姉ちゃんは……私じゃあ無理だよ」

涙目ながら雫は雫を凝視し、後退る。雫にも何か雫とあったのだろう。

「『雷の（ライトニング）矢』^{アロー}」

悠二は茜に手向け、無詠唱で下級雷系魔法を放つ。茜の首を通り過ぎ、後にいた男に命中する。

「ぐあっ」

男の悲鳴と体をビクッと震わせ倒れるのが同じだった。雷の矢は下級魔法ながら、スタンガン並の威力はある。

「え？あ、ありがとう」

茜は悠二に頭を下げお礼を言い出す。もしかして、この子は今の状況を理解していないのじゃ……。

「後、七分ですよ。頑張ってね」

優雅に学園長は応援してくれるが、爆音であまり聞こえてない。

第四話 入学式（後編）

「あの学園長は何歳だ？」

ふと、疑問になる。学院長は何歳なのだろう……。どうしても同い年に見える。

「《秘密ですよ、悠二さん》」

悠二は学園長に聞こえていた事にびっくりした。

「さて、集中するか」

意識を全体に向け、人を『視る』のではなく意識を集中して気配を『感じる』。これは昔にイギリスのある人から教わったものだ。

既に百人いた新生は五分の一にまで減っていた。

「雫、少しの間茜を頼む。俺は周りの奴らを減らして来る」

雫の返事を聞く前に悠二は疾走する。とりあえず狙うのは濤以外の上級生。前にいた上級生の男は悠二に気付くが、対応が遅く悠二の右足の膝蹴りを鳩尾に叩き込まれ、倒れ伏せ悶える。

さらに近くにいた男の首に左足の廻し蹴りを放つ。勢いを利用してもう一人の男の後頭部に、手刀を見舞う。悠二は数秒で三人の男を撃沈させる。

「まったく接近戦闘が弱すぎだろ」

倒れ伏せる男達に言い捨てる。後から魔法が放たれた事を感じ、魔法障壁をすぐに展開する。

「甘い、バレバレだ」

振り返り魔法を放った男に向かって疾走する。男は「げっ」と品もない声を出し、次の魔法に取り掛かろうとするが、悠二の速さに追いつけずに、呪文を唱える前に蹴りの餌食になった。

意表を突いたが、悠二は上級生にはガッカリした。いくらなんでも弱すぎる。

「しかしまあ、これから上級生から目を付けられるだろうな」

悠二の息は上がっておらず、溜め息を吐きながら雫の方をちらっ

と見る。雫はきちんと防御に徹していて、言った通りに茜も守っていた。

「さて、強い奴しか残ってないから気を引き締めないと、な」

残り五分くらいで既に、立っているのは悠二達を含め二十人くらいだった。濡はいつの間にか端っこで見物していて、楽しそうに悠二を見ている。

「きゃっ」

雫達の方から悲鳴が挙がり、悠二は焦って振り返る。雫達の周りには五人の上級生らしき女性が囲んでいた。

「はあ、女性は殴りにくいからな……魔法でいいか」

意外と悠二は紳士で女性を殴りたくない。魔法はタツプリと使うから紳士とは言わないかもしれないが……。掌を女性に向け、膨大な魔力を使うために集中する。

「我は雷を求む者なり 閃光のごとき速さの雷撃で我が敵を討ち果たせ『雷天・閃光雷』」

詠唱を終え、掌から五つの球状の雷魔法を放つ。それぞれ五人の女性に雷の塊が一瞬にぶつかる。それはまさに閃光の速さで、光ると同時に女性は雷に撃たれて倒れてしまう。

「凄い」

茜の感心する声が聞こえた。

「ふう、大丈夫か？」

俺は雫達を笑いかけながら声を掛ける。

「大丈夫だよ、悠兄ちゃんありがとうね」

雫がペコリと頭を下げ、あげた顔はほんのりと紅潮していた。茜はポケットと悠二を見詰めていた。

「悠二……また強くなったね」

傍観していた濡は真っ直ぐ悠二を見ながら歩いてくる。周りの奴らは襲って来る気配がなく、濡に集まっていく。いつの間にか悠二達を含めて十人になったようだ。

悠二達以外は右腕に赤色の腕章を身に付けていて、濡は『会長』

と黒文字で書かれている。

どうやら残った七人は生徒会のメンバーらしい。

「執行部を簡単に倒すとはね。でも、生徒会は私を筆頭に強いから、そう簡単にはいかないわよ」

滯の表情には笑顔が消えており、真剣な眼差しで悠二達を見詰めている。

「生徒会なんか興味は無い。興味があるのは滯だけだ」

悠二は特に意味はなく、三年前の借りを返そうと言っただけだった
が……。

「そ、それって……こ、告白？」

言うなりボツと滯の顔は真っ赤になり、耳まで赤くなる。シーンと体育館は静まり返る。

「へっ？」

我ながら情けない声だったと思う。

「滯さんに関わるな。変態」

「会長に話し掛けないでよ」

悠二は女子生徒に罵倒された。二人の生徒会役員はいきなり数メートル先から同時に魔法を放ってきた。

「『氷の（アイス）矢』^{アロー}」

「『炎の（ファイヤー）矢』^{アロー}」

悠二に数十及ぶ二種類の魔法の矢が飛来してくる。さすがにその辺の奴らとは違い、一度の魔法の矢の数が違う。

「『稲妻の（ライトニング）剣』^{ソード}」

悠二は瞬時に魔力を練り、冷静に対抗の魔法を放った。頭上に四メートルくらいの雷の剣が現れ、魔法の矢を弾きながら二人に向かって行く。稲妻の剣は何かに当たり、激しい爆音を鳴り響きさせながら体育館を揺らした。

生徒会役員は石畳にへたり込みながら、咄然と悠二を見上げていた。二人の前には氷の壁があり、それが稲妻の剣を受け止めたらしい。

この場に居る者でそれができる生徒は滯くらいだろう。あの一瞬であれだけの壁を作り出したのだ。さすがとしか言えない。

「うそっ……上級魔法を無詠唱でなんて」

驚いた顔をしながら立ち上がりとうとするが、腰が抜けたらしく立ち上がれない。

「女の子に危ない魔法は使わないの。怪我でもされたら困るじゃない」 顔が赤い滯はそっぽを向きながらそう言い、悠二と目を合わそうとしない。

「まあそうだけど。それより滯、さっきの話は？」

「知らない……それより勝負しようよ」

滯は悠二に向き直り、上に掌を向ける。直後に膨大な魔力が滯から溢れだす。

「我が守護者よ、契約の通り我を守り、我が敵に死を与えん。『
ホワイト・ドラゴン
白龍』」

滯の前に二メートルを超す魔方陣が出現する。そこから全長八メートルはあろう白色の龍ドラゴンが現れる。滯の守護聖獣にして相棒のエレナ（滯が考えた白龍の名前）。

「おいおい、やり過ぎだろう……エレナを呼ぶなんて卑怯だろ」

「悠二も出したらしいじゃない」

滯はエレナの頭を撫でながらクスクスと笑いだす。抗議のしようと学園長を見るとニコツと笑われ、意味がないことが理解できた。今度学園長にメイド服に猫耳を着せようと、悠二は心の中で考えた。そのあと学園長は喜んで着たそうだ。

「雫は生徒役員を頼む。茜は雫を手伝ってあげてくれ」

「頑張ってね、悠兄ちゃん」

「悠二さん、気を付けてください」

雫と茜は悠二から離れ、生徒役員に向かっていった。滯の前にいた二人もすでにいなくなっている。

「滯、昔の借りを返してやる」

「そう、なら頑張ってみたら……エレナ」

エレナは膨大な魔力を口に溜めていく。悠二も黙っていない。自分も攻撃するために魔力を練っていく。

「最強にして最速の剣よ、我の矛となり敵を打ち砕かん『稲妻の（ライトニング）剣』」

八メートルの雷の剣が悠二の頭上に現れた。悠二はすぐさま滯に向かつて放つ。それと同時にエレナは氷の吐息を放っている。滯と悠二の間で剣とブレスがぶつかり、轟音を起こした。たちまち氷は解け蒸発していくが、ブレスによって水蒸気を凍らし始めた。

理由はエレナのほうが魔力で勝っているからだ。さすがにスクラスの守護聖獣の魔力には勝てない。

悠二が立っていた場所には氷の塊が出来あがる。そこには悠二の姿はなかった。

「殺す気か！」

悠二は水蒸気に隠れて滯の後ろに回り込んでいた。すぐさま悠二は滯の後頭部に蹴りを放った。

滯は不意を突かれていて動けなかったが、さすがSクラスの守護聖獣。エレナは尻尾で悠二の蹴りを簡単に受け止める。悠二は離れてすぐに魔法を使おうとしたが……。

学園長は悠二の腕とエレナの尻尾も両手で掴んでいて、悠二は魔法を使えなかった。どうやらエレナも動けないようだ。

「お楽しみ中悪いわね。時間になりました」

学園長はいきなり石畳の中央、悠二と滯の真ん中に踊り出ていた。悠二は学園長の近づく気配すら気づかなかった、もしかしたら瞬間移動を使ったのか……。

「ふふ、悠二さんはお強いですね……。四、五年の執行部では取り押えるのもキツイでしょうね」

学園長は困った顔というより、嬉しそうに微笑んでいる。すでに悠二の腕とエレナの尻尾を離れていた。

「そうだわ、悠二さん。あなた生徒会に入らない？」

「生徒会にですか？」

「ですが学園長、役員は埋まっていますが？」

「そうですね滞さん、なので新しく作ってしまいます。そうですね……生徒会長補佐はどうですか？」

「賛成します学園長」

滞がすぐに学園長の案に賛成を示した。エレナはどう対処しているのやらわからないのか、首を傾げていた。

「すみませんが引き受けることは出来ません」

「そうですか……う、う、うええええん。悠ちゃんがあゝ、由紀を苛めるよおゝ」

いきなり学園長が泣き出し、悠二とその場の人達は意味が解らずボー然と突っ立っている。

猫耳スーツの学園長は俯き手で目を擦っていて、その仕草が小学生のようで微笑ましく思う。

悠ちゃん？なぜ学園長は俺のことをそう呼んだのか、そのことがどこか心に引っ掛かったが、それどころではなくなった。学園長の魔力が暴走して体育館がミシミシと軋み始める。滞に聞いたところ、この体育館には魔法を外に出さないように、あらゆる壁や天井に對魔法の結界が張られているらしい。

「悠ちゃん、この猫耳に見覚えないかなあゝ」

学園長は作り物の猫耳を指さして、悠二を上目づかいで聞いてくる。もちろん悠二に見覚えがあるはずはない、はずなのだが……なぜか絶対ないと言い切れなかった。

沈黙が流れる。この間にも体育館はどんどん軋み、先生たちも慌て始める。学園長の魔力がさらに膨大になり、悠二の目にもはっきりと魔力が視覚できるようになる。こんなに魔力がはっきり視覚できたのは何年振りだろうか……。

「悠ちゃんのバカあゝ」

学園長の叫び声と共に膨大な魔力が飛んできて、悠二は意識を失う。まさか魔力に当てられて気絶するとは悠二は、このときまで夢にも思っていなかった。

◇

「……あれ？」

正気を取り戻した由紀は、倒れた悠二と滯をおろおろと見下していた。由紀の魔力に当てられた悠二達は気絶したわけだ。雫と茜と生徒会メンバーも遠くで倒れていたが、由紀は知らなかった。エレナは滯が気絶と同時に消えている。

お前は」

由紀の後ろには瞬間移動テレポートを使った和馬が呆れながら立っていた。

「生徒を気絶させて何するつもりだったのだ？ 体育館もこんなにして」

「いやこれはね、えっと……」

和馬は体育館と息子の悠二を見てため息を吐いて、首を振っている。体育館の対魔法の結界は粉々に砕けていた。

だって、悠ちゃん私のこと覚えてないのだもん……ううう」

「前に話しただろう、悠二は六歳から前の記憶……あれだって」

「でも、でもお」

由紀も悠二のそのことについては知っていて、悠二の記憶には自分がないことも……。

当時十歳の由紀と五歳だった悠二は、親同士が知り合いだったため二人は出会った。由紀は弟のように悠二を可愛がり、毎日一緒に遊んでいた時期があった。だが、その時のことを悠二は覚えていない。

「……由紀」

「わかってる、しょうがないことだって……でも悠二が私のことを覚えてくれてないのは……」

悠二の記憶には自分がいない。それが一番納得しなくつい聞いてしまったが、結果は……最悪だった。

「この猫耳は悠ちゃんからもらったのに、これ見たら思い出してくれると……思ったのに」

由紀は周りのことも考えずにへなへなと座り込み、目に溜めていた涙を流していた。

「こんなあんなまりだよ。大切な人に忘れられるなんて……」

第五話 可憐な騎士



入学式は問題なく無事に？終わった。新入生の殆どは、半日くらい気絶しているだろうが……。その一人でもある悠二は何日か過ごした寮の部屋で寝ていた。あまり覚えてないが、学園長の魔力でみっともなく気絶したのは覚えている。それからあとは予想だが、先生が寮まで運んでくれたのだろう。

悠二が住んでいる寮は一人部屋で、二人部屋でも別に大丈夫な程広かった。

「最後学園長が言っていたことはなんだろう？」

学園長の言葉には何かあるのだろうか？悠二は起きてから一人考えていた。

……ピンポーン。

ドアチャイムの音で考えるのを中断し、気絶したままの恰好な形で制服姿で、悠二は玄関に向かった。玄関の扉を開けると、そこには学園長がモジモジとしていた。

「お、おはよう。悠ちゃん」

学園長は黒色のスーツ姿に猫耳と昨日と同じ格好をしている。昨日と違うところは、綺麗な栗色の髪の毛をポニーテールにしているところだろう。

「えっと、おはようございます」

悠二の寮は男性寮で、学園長が来る理由はないはずだ。何しに来たのだろうと悠二が考えていると、学園長が何か言いたそうな顔をしていた。

「どうかしましたか、学園長？」

「えっとね、生徒会に入って欲しいのだよね」

なぜ、一介の生徒に躊躇って言っているのだろうか？普通だったら強制的に入れることも出来る筈だ。

「あと、私のこと……由紀姉って呼んでくれないかな？ダメかな？」

身長差があるためか、学園長の目線は自然と上目遣いになってしまふ。学園長の瞳には少し涙が溜まっていた。

「え？なぜですか？」

「そう呼んでくれると……嬉しいから。ダメ？」

悠二が聞き返すと悲しそうな顔をし、俯きながら弱々しく泣きそうな声で言う。なぜか学園長の悲しむ姿を見ると、胸が締め付けられるような痛みが走る。

「由紀姉……これでいいですか？」

どこか懐かしいような響きに悠二は戸惑う。なぜ、懐かしいような感覚になるのか、もしかしたら学園長……由紀姉のこと知っているのではないか？そんなことを繰り返し考えていると学園長が嬉しそうに何度も頷いていた。

そのあと何度も「由紀姉」と呼ばされ、会話の成り行きで生徒会に入ることに……。

玄関で長話もあれなので、テレビを置いている部屋に入りしばらく話していると、濤が乱入してきて大変だった。

そのあと悠二は、生徒会長の濤と学園内を散歩している。なぜかと言うと、「悠二は生徒会長補佐なのだから、片時も私から離れたらダメよ」と濤は嬉しそうに言い出し、学園内を案内してくれることになった。

「ねえ、学園長と部屋で何していたの？」

「何もしてない」

「本当に本当？」

なぜか濤はしつこく聞いてくる。何をしようが、濤には関係ないだろうに……。否定しておかないと、後々大変そうだからする

が。

「学園長とは何もしないし、何も関係ない」

「そう……ならいいわ」

「そういえば、入学式の受付に金髪の子居たよな？」

とりあえず話題を変えて、楽しい会話にしよう。

「む、まあいいか。たぶんシルヴィアのことね。超能力者で生徒会の副会長よ」

鳳凰学園には学園長の許可さえあれば、外国人だろうが誰でも学園に入学することができる。現在の生徒会には超能力科と魔法科に一人ずつ副会長がいて、それぞれの学科を取り仕切っている。

「シルヴィアがどうかしたの？」

漣は何かを考えるような顔をし、首を傾げる。

「なんとなく気になったから」

でも金髪にシルヴィアか……。まさかあいつじゃないよな。超能力なんか使えなかったし、あんなに美人じゃなかったし、名前はただの偶然だろう。いや、そう思いたい。

それに今考えてもしようがないか、いずれにしろ会えばわかることだ。

「も、もしかして……シルヴィアに、ひ、一目惚れしたんじゃないでしょうね」

漣は動揺した顔で悠二の顔をジロジロと、探るような瞳で睨む。

「そういえば、今思い出したら綺麗な顔だったな」

「……え。本当に、一目惚れしちゃったの？」

漣は一気に萎れた花みたいに俯いてしまう。

「漣、可愛いよ」

悲しそうにする漣を見て、つい恥ずかしい言葉をサラっと言ってしまふ。恥ずかしさのあまり悠二も俯いてしまった。

「え、え、ありがとう」

漣は照れているのか、ニヤニヤした顔で悠二を見詰めていた。漣は頬を手で覆い「嬉しい過ぎだよ」とか呟きながら腰をクネクネ動

かしていた。

そんな滯も可愛く見える。

「滯、これから何処に行くのだ？」

「えっと……これから生徒会室に行ってから、生徒会のお仕事を教えてあげるよ」 滯はまだ照れているのか、そっぽを向きながら言った。

「わかった、じゃあ頼むよ」

「うん、わかった」

◇

「えっと、此処は校庭だよな？」

「ええ、そうよ」

悠二と滯は校門から入ってすぐの校庭に居た。入学式前に茜を助けた場所でもある。

「校庭に何のようだ？」

「入口は何箇所あるのだけど、此処が正式な入口よ」

滯はスタスタと歩き、校庭の真ん中で立ち止まる。そこには円形で落書きみたいながもの書かれており、その直径5メートルはあるだろう。

「魔法陣？」

「そうよ」

魔法陣を踏むが、特に変化はなかった。

「ふふ、そんなに難しい顔しないの。鍵^キがないと人が入れないようにしてあるのよ。はい、これ」

滯は楽しそうに笑いながら、右手で生徒会（仮）と書かれた手帳を悠二に渡してきた。 「この生徒会の手帳が鍵よ。

これがないと魔法陣は発動しないから」

確かに触れただけで生徒会室に行けたら、滯のファンで大変な騒ぎになるだろう。

「生徒会長補佐は今までなかった役職だから、学園長に作って頂いているわ。とりあえずは仮でお願いね」

「わかった」

「入り方は簡単よ。生徒会手帳に魔力を流し込むだけ」

滯の左手が赤く光り、呼応するように魔法陣も光り輝き始める。次の瞬間、周りの景色が唐突に変わった。

「ここが生徒会室？」

「そうよ」

目の前には二階建ての豪邸が、手入れされた木々に囲まれながら、堂々と建っていた。まっ白な壁に、赤い屋根。どこから見ても、豪邸と言える物だった。

「生徒会室と言うより、豪邸じゃないか」

「確かにね。でもまあ、男が多少のことを気にしない気にしない」
啞然と豪邸をみている悠二を適当にあしらひ、滯は豪邸に歩いて行く。

「生徒会役員には寮とは違う部屋がここにあるのよ」

ニコリと笑い掛けられ、自然と俺も笑みが浮かぶ。

「ということは……俺にも部屋があるのか？」

「うーん、難しい質問ね……。学園長に聞かないとわからないわ」
どこが難しい質問なのかわからない。一応は生徒会役員になったわけだし、部屋が足りるならあってもいいくらいだ。とはさすがに言えず、滯の隣で苦笑いするしかなかった。

……ギィィ。

滯が大きくて重そうなドアを開け、中に入っていく。悠二も後からついて中に入る。豪邸の中も白を基調にされていて、綺麗に片付けられていた。玄関も丁寧に掃除がされているのか、新品みたいにピカピカだった。

「とりあえず、生徒会室に行きましようか」

滯はニコニコと微笑みながら、悠二に手を差し出す。悠二が手を取ろうとすると、背後に人が突然現れた。近くには人の気配がし

なかったから、瞬間移動かなにせう。首元には両刃の剣が突き付けられている。刀身は白く輝いていて、首なんかあつという間に斬れそうだ。

「シルヴィア？」

滯は不思議そうに、背後の人……シルヴィアに問い掛けていた。

「神崎悠二だな」

心臓を突き刺すような、鋭く冷たい声で聞いてくる。後ろに立っているから顔は見えないが、入学式に会った時の顔を思い浮かべる。

「そうだが？」

危機的状況だが、「いつも冷静でいろ」と親父に言われている。だから、悠二は焦らなかった。

「貴様の首貰う」

シルヴィアは言い放つなり、首を撥ねようと剣を動かす。さすがに簡単に首をやるわけなく、下にしゃがみ込み避ける。読まれているようで、悠二を撫で斬りしようと振り下ろしてくる。

「っ！！」

呆然と突っ立てる滯を尻目に、左に転が込む。振り下ろされた斬撃は鋭く、制服を少し裂かれる。シルヴィアは左に避けた悠二を追い討ちとばかり手首を返し、横殴りしようとする。

「ちよつと待って！シルヴィア！」

滯の制止を聞かず、シルヴィアは悠二に必殺の斬撃を浴びせようとする。横殴りを後に飛び避け、一度間合いを空ける。

あの剣撃にあの剣……間違いない。シルヴィア・アルフォート。そんな名前が頭から出てきた。悠二は封筒サイズの茶色に変色した古ぼけた紙を取出し、小さな巻物みたいにグルグルに巻いた紐を解く。　「滯、これ見てみるか？」

悠二は紐を解いた紙の裏を滯に見せて聞いてみた。

「え？」

「ちよつと！それはダメだよ。悠君！」

先程の冷たい声とは違い、女子の声でシルヴィアが言い放った。
シルヴィアは顔を赤く染めジタバタし始め、焦っているのがバレバレである。

「なに悠二。見せて！」

「ダメ漑！悠君、絶対に見せないでよ」

漑はシルヴィアの急変で興味津々な眼差しになって、悠二に向かって疾走してくる。漑を追うようにシルヴィアも悠二に向かって疾走してくる。

ここまでシルヴィアがそこまで反応するとは思わなかった。元々近かったからすぐに悠二の目の前にくる。目の前でシルヴィアと漑が、悠二の手から紙を奪おうとするが、お互いを邪魔しあっている取れないらしい。何もしなくてよさそうだ。取れた方が見ればいいしな、といいアイデアを思い付いた。

「シルヴィア、邪魔しないでよ」

「漑こそ邪魔をするな」

漑は親しくない相手と呼び捨てにしないから、二人の仲は随分といいらしい。

「シルヴィア、久しぶりだな」

悠二はシルヴィアに話し掛け、昔のクセなのかつい撫でてしまう。シルヴィアは顔を真っ赤にしたまま固まってしまった。その隙を見逃さなかった漑は、悠二から紙を奪い取る。

「あつ！漑、見ないで」

「ふふ、嫌よ」

漑は片手でシルヴィアを押さえて、渡さないようにしていた。漑より背が低いシルヴィアの手は届かない。姉妹のケンカのようなのだ。

「……え？これは悠二？」

「……もうダメ、恥ずかしくて死にそう」

シルヴィアには出会い頭の勢いはなく、へなへたと床に座り込んでいた。

古ぼけた紙には、悠二が十歳だった時の自画像画が描かれている。

シルヴィアが書いてくれたものだ。別に恥ずかしくなるほど下手ではない。むしろ十歳が書いたとは思えないくらい上手かった。ちなみにシルヴィアは飛び級していたため、歳は悠二と同年だ。

「……」

「……ねえ、シルヴィアと悠二ってどんな関係なのかな」

漣はニツコリと笑っているが、何故か怒っているような感じがするのなぜだろう。

「なんだろうな……兄妹？かな」

悠二の言葉にシルヴィアはビクツと反応する。

「ところでシルヴィアはなんで襲って来たのだ？」

「……どうして入学式に話し掛けてくれなかった？」

もしかして無視したからか、寂しそうな目をしていた。床に倒れ込んでいるから自然と上目遣いになる。

「受付の時だろ。いやあ、あんまり可愛くなり過ぎだから、気が付かなかったわ」

「え？」

ぼっとシルヴィアの顔が赤くなる。さらにはオロオロとし始め、俯いてしまった。漣は横から槍を刺すような眼差しを悠二に向けてくる。

なんかしたかな？

「シルヴィア、もしかして無視したから襲ってきたのか？」

「え、ううゝ」

シルヴィアは俯き、可愛らしく呻いた。さっきの強気とのギャップがまた可愛さを引き立てる。

「……悠二のバカ」

漣が小声で呟くが、悠二には聞こえなかった。

第六話 引越し？



少し怒った感じの滯と、ニヤニヤと後ろを付いて歩くシルヴィアと共に、真ん中の赤い絨毯が敷かれた階段を上っていく。悠二は生徒会室と役員部屋（生徒会役員用の部屋）の場所を案内してもらうため、二人に案内してもらっているが、なにやら空気が重たい。

階段を上ってすぐに、生徒会室と書かれた表札がある部屋があった。

「ここが生徒会室よ」

滯は不機嫌で雑にドアを開け、中に入っていく。続いてシルヴィアと悠二は一緒に中に入るが、誰もいなく物静かだった。部屋は大きく、真ん中に大きな机があるくらいだ。その周りには肘掛けの付いた立派な椅子が並べてあり、机の上には「生徒会長」と役職が書かれた紙が立たされている。会社にある会議室のような生徒会室だった。

「豪勢だな」

「当たり前でしょう」

滯は不機嫌なようで、ため息を吐きながら一番奥の生徒会長の席まで歩き、座るなりなにやら独り言を呟いている。滯が座る生徒会長の椅子はさらに豪華そうな椅子で、数十万するようなものだった。椅子のことはそんなに知らないから勘だが間違いないだろう。

悠二はシルヴィアと扉の前で立っている。

「まさかシルヴィアと知り合いとは……迂闊だったわ。なんでシルヴィアがあんなことをする意味がわかったし、……やられた。まさか先手を打たれるとは……」

滯は一人で呟きながら何かを考えているようだ。

「そうだ。悠二の席は私の隣ね。会長補佐なのだから当たり前よね」

何が嬉しいのかさっぱり悠二はわからないが、漑の機嫌が直ったみたいで、いつもの魅惑的な顔に戻っている。

「ちよっと、漑。それは……」

「いえ、これは決定事項よ」

「まあ、俺はどこでもいいが……生徒会なんかしたことないから、何したらいいかなんてわからないぞ」

「悠二は実質的にナンバー2だけど、問題とかは今まで通りにシルヴィア達が何とかしてくれるわ。だから悠二は私の隣に居てくれたらいいのよ」

それでは必要ない気がするのだが……。

「よし、次は……私の部屋ね。あ、シルヴィアは来なくていいから」

「へっ?」

「何?シルヴィア。そんなに悠二のこと……」

「ちよっと漑。それは言っちゃダメ」

「なら、文句はなしね」

漑はガタツと椅子から立ち上がるなり、悠二の所まで歩いて悠二の腕に手を廻す。漑は悠二をエスコートするようにして、生徒会室を出ようとしていた。

「あららら、お邪魔かしら?」

「「学園長」」

学園長の由紀がいつの間にか扉の前に立っていた。

「悠ちゃん。逢いたかったよう」

「ゆ、由紀姉」

漑がいることを無視し、由紀は悠二に抱きついてくる。いきなりこのことで、悠二は由紀のなすがままにされていた。

由紀は年上相応の胸で、いや本当の歳は知らないが……かなりのボリュームである。

「悠君……なんで学園長を由紀姉って呼ぶのかな?」

シルヴィアはどこか怒ったような顔をしていて、興奮しているの

か少し顔が赤くなっている。

「いや、由紀姉がどうしてもって言うから」

本音はどこか懐かしい響きに安心感があるからなのだが、なぜ懐かしいのか自分でもよくわからない。学園長とは初めて会ったはずなのに……。

「む、それはいいとして……なんで学園長が悠君に抱きついていてるのかな？」

やはりシルヴィアは怒っているらしい。さらに先程とは打って変わって、滯も不機嫌オーラが漂っている。これはやばい何とかしないマジで死ぬかも……。

「あれ？知らなかったの？私と悠ちゃんは愛人関係なのだよ」

「なっ！」

「なにそれ!？」

滯とシルヴィアから殺気が……死んだ。まだ十五年しか生きてないのに……。

「ちよつと待った」

とりあえず無理やり悠二は嫌がる学園長を引き離し、

「由紀姉、冗談はやめてっ……この二人冗談通じないから」

「まあ、私は悠ちゃん一筋だから彼氏なんか居たことないけどね」

「……」

何だろ？愛人疑惑は晴れたのに、さらに強い殺気を背後から感じる。……シャキーン。鞘から剣が抜き放つ時の音が背後からする。おそらくシルヴィアだろう……首筋に冷たい刃物の気配がする。

シルヴィアの両刃の剣は悠二の首筋にあり、いつでも切れる態勢に入っていた。滯も手に魔力を溜め魔法を放つ用意が整っている。悠二は首筋に汗が流れるのがわかった。

「あ、そうそう。悠ちゃんはこれから私の家に住むことになったからね。荷物も運んでいるから。てへっ」

最後にハートマークが付きそうな甘い声と、可愛く仕草をする学園長に一同がボー然とする。

「……なっ」

「一緒にまた暮らせるのかあ、嬉しいなあ……って学園長、さすがにそれはどうかと、この学園長の家には生徒会役員が集まるところですよ」

「そうだよ。大丈夫、悠ちゃんは私一筋だから大丈夫」

「ですが……」

学園長は楽しそうに話すが、なぜか漑は渋っている。

「……もしかしたら嬉し恥ずかしいアクセントが……」

シルヴィアは何を妄想しているのかわからないが、悠二は背筋に寒気のようなものがした。

「なんでそんなに嫌がるのだ？」

漑はどうしてそんなに渋るのだろうか？特に問題はない気がするが、とりあえずわからないので問い掛ける。

「なんでって、もしかして悠二知らないの？生徒会のメンバー全員女性よ」

「は？」

確かに昨日体育館にいた生徒会役員は女性だけだった……特に気にしなかったから気が付かなかった。



漑は反対しながらも心の中では、もう一度悠二と一つ屋根の下で暮らせることに嬉しいと感じていた。

くう、私としたら嬉しいのだけど……これ以上面倒なのが悠二にくっ付いたら……。だいたいなので悠二には雫はまだしも、シルヴィアといい学園長といい、こんなに女の子が周りにいるのよ！一緒に暮らしたいけど、女の子がうようよいあるこの場所は避けたいな。

「学園長、やはり生徒会長としては認められませんか」

嬉しい気持ちを押し殺して漑は、対抗することにした。

「さずが、私が認めた生徒会長ね『でもいいの？こんなチャンス

を無駄にして』」

後半の学園長の言葉は頭に響く、この感じは念話。^{テレパシー}

漑は念話を使えない。なので、言葉を口にしないと学園長と意思疎通することはできない。そこが念話の弱点だった。最大の長所は、軍事機密などを特定の人物に話すことができ、ほかの誰にも聞かれない所。そのため、念話を使える人は国に重宝される。

「うう」

学園長に痛い所を突かれ、呻いていた。悠二は何かを考えているのか、突っ立ったまま動いていない。シルヴィアは変な妄想をしているのだろう、顔を赤くしながらごによごによと何かを言っている。「『いいの？こんなチャンスないわよ。それに悠ちゃんには許嫁がいることは知っているでしょう？』」

「うう」

そう、悠二は知っているのか知らないけど許嫁がいる。直接悠二に聞いたことはないが、新聞で大きく掲載されていた。それを思い出すと、胸が刺されるように痛い。

「『それに彼を守るには……』」

「なんですか？学園長？」

「いいえ何でもないわ、気にしないで」

故意的に念話止めたのかわからないが、悠二達は意味が解らないような顔をしていた。



あれから十分後漑が折れ、悠二は学園長の家（生徒会寮）に住むことになった。正直、悠二は普通の寮がよかったのだが、学園長と二人に強制で住むことに……なった。悠二としては女性ばかりの家に住むのは嫌なのだが、「普段は生徒会のメンバーはこの場所に泊まらないから安心して」と言われ、少しばかり安心した。

今は学園長が運んできた荷物を整理している。

それにしても、最初から考えられていた感じがするのだ。部屋は一階の学園長の寝室の隣で、それは特に変ではない。由紀姉曰く、客室として使う予定だったと言っていた。が、こんな女生徒が住む家なのだから男性が入ることは考えていなかったはず。もし、仕事の用事なら学園に接待室が設けられている。それなのにあるのだ、男性専用のトイレが……。

「気にし過ぎかな？」

「何が気にし過ぎなのかな？」

悠二は整理が一通り終わり、ベッドでくつろいでいると急に由紀姉の顔が現れ、驚いて体を揺らす。何の兆候もなしにいきなり現れたのだから当然である。

「由紀姉、ノックもなしに入ってきて来ないでよ」

ふと気づいたのだが、いつの間に学園長と馴れ馴れしい言葉づかいになっているのを、やっと悠二は気付いた。それになんだか懐かしい感じに悠二は困惑する。だが、呼び方が馴れ馴れしいのだから普通か、悠二はそう自分で納得する。

「……いいじゃない、こんな美人が訪れるのだから」

学園長は少し寂しそうな顔をするが、すぐにいつもの何か悪戯をしそうな顔になる。

由紀姉はスーツから清純そうな青い色のワンピースに着替えていて、本当のお姉ちゃん感じがする。

「で、由紀姉なんか用？」

「もう、つれないな」

なにがつれないのか悠二にはわからないが、由紀姉の頬を膨らませた姿が可愛く思う。

「由紀姉、ここ本当に客室の予定だったの？」

「……そうよ」

さっきの間はなんだろう？　なんか隠している気がしてならない。

「なら、彼氏もないのに、なんで男性専用のトイレがあるの？」

「え？……ああ、それはね……えっと、もしかしたら必要になる

かなって思っ

いかにも今考えました感がするが、学園長があんまり触れて欲しくなさそう顔をするので、悠二はこれ以上の追及はしなかった。

「さあ、私を押し倒しなさい」

「いや、押し倒されているのは、俺なのですが……由紀姉」

なぜか由紀姉は俺の両手を掴まえ、馬乗りにされている。

——コンコン、ガチャ。

「……ふふっ。私が一番乗り……」

いきなりドアが開き、シルヴィアが入ってくる。ベッドに押し倒された悠二と、押し倒している学園長を交互に見るなり、シルヴィアは固まってしまう。

「悠二、お邪魔するわよ」

さらにノックも遠慮をしない滯も乱入してくる。反応はシルヴィアと同じでボー然と突っ立っている。

「悠二、死にたい？それとも殺されたい？」

明らかに選択肢が一つしかないような気が……。

「生きるという選択肢は？」

「「ない」」

シルヴィアと滯は見事にハモる。由紀姉も退いてくれないし、どうしたらいいのだろう。そもそも、俺のせいではないし……。そのあと何とか危機を脱出した悠二は、苦戦しながらも風呂と食事を済ませ、熟睡した。



赤神茜は一人、寮のベッドに横たわりリラックスしていた。神崎悠二……それは入学式の日に茜を助けてくれた人物であり……でもある人物。茜は打たれた右肺の辺りを触る。触っても関係ないのだが……意識の差である。

「うん、治っているね」

入学式から一日が経ち、昨日撃たれて穴が開いた右肺は完全に塞がっている。治療してくれた生徒会長の氷見会長は驚いた顔をしながらも、治癒魔法を掛けてくれた。

「別に治癒魔法なんか必要ないのだけどね。……でも、なんで銃弾なんか飛んで来たのだろう？」

さすがに油断していたとはいえ、常時展開されている障壁を貫通されるとは夢にも思わなかった。しかも、探知魔法が効かない範囲の外からの精密射撃……かなりの腕だ。

「でも、ある意味助かったかな。悠二さんに接触する時間が省けたしね……」

茜は可愛い寝間着の姿で、天井を見詰めていた。

「うーん。悠二さんの気配がしない。結界の中にでもいるのかな？」

茜は何度目か探知魔法を展開させて、悠二の居場所を探してみるのがわからなかった。今日の昼くらいから気配が消えた。おそらく結界で守られているのだろうが、だいたいの居場所がわかる。

「山の中心地あたり……しらかわ ゆき白川由紀。また面倒な所にいるわね」

山の中心地あたりには、探知魔法が無効化されている。茜の探知魔法はこの鳳凰学園がある、島（人工島）が範囲領域になる。これだけの探知魔法が使える魔法使いは、世界でも少ないだろう。

「まあ、いずれチャンスは来るわね。ふふっ、楽しみね」

茜は昨日見た悠二と澪の戦闘中ずっと二人を見ていた。雫が常に気を使ってくれて、楽に観戦することができている。二人は既に高校生では頭一つ分は違うレベル。特に澪はまだ秘策を隠していそうな感じで、かなりの腕だろう。さすが一年から生徒会長に任命されただけはある。

「悠二さん……」

ふと、昨日悠二に撫でてもらった頭に手を乗せてみる。この赤髪せきはつに灼眼しゃくがんの所為で避けられて生きてきた……しかし悠二は気にする様子もなく、この赤髪に触れてくれた。

茜は顔が熱くなっていることに気づき鏡を見る。顔は真っ赤で、まるで恋する少女のようだ。

「恋?……いや、これは高揚感かな。今日は三日月か……お母様もうしばらく、我慢してくださいね」

ベッドの近くの窓から、綺麗な三日月が見えた。

あれからかなりの時間起きていて、寝たのは三時を軽く超えていた。入学式から一日休みで今日は学園の登校日だ。もちろん遅くに寝た茜も例外ではなく登校中。寮からすぐの所に校舎があり、登校時間はかなり短い。というより、三分も掛からずに着く。

何やら前の方が騒がしい。意外と興味津々な茜は気になり、少し早歩きで歩いているとその犯人がわかった。

「シルヴィア、離れなさいよ」

「濡が離れたらいいじゃない」

「まあまあ」

「悠二は黙っていて」

靴箱前で悠二は、濡とシルヴィアに両腕を引っ張られている。その周りでは「なんであいつばかり」などの文句などを言う野次たちでいっぱいだった。

「ふむ、悠二はモテるのか?」

「そうだよ」

いきなり背後から声がし、振り返るとツインテールが似合う少女が立っている。入学式の時に出会った生徒会長の妹、雫が話し掛けていた。

「ええ、いつから後ろにいたの?」

「ついさっきだよ」

「そうなのだ。雫ちゃん、おはよう」

「うん、茜ちゃんおはよう」

まさか、こんな近くに来るまで気づかなかったなんて……。彼女も警戒していた方がいいわね。挨拶を済ました雫は、悠二の所まで

駆け足で向かっていく。

「ごめんなさいね、悠二さん。これも……為なのです
彼女に聞こえないように呟く。今日はいい天気だ。」

第六話 引越し? (後書き)

ちょっと短いですが……第一章が完結しました。誤字や脱字がありましたら、ご報告してください。

さて、第一章を書き終えての感想は、ヒロインが多過ぎました。そのため、これからは一人一人を個性的にしようと思います。

第一章を読んで頂き、ありがとうございます。何人もお気に入り登録して下さい、嬉しいです。これからも、よろしくお願いします。感想や評価の方もよろしくお願いします。

第一話 穏やかな日常

今日は入学式から二日後の登校日である。目覚まし時計の音で起きた悠二は、欠伸をしながら昨日のことを思い出す。学院長によって生徒会に無理やり入れられ、さらに由紀姉と呼ぶことになった。

「由紀姉か……」

やはりどこか聞き覚えのある響きに、悠二は頭を傾げる。

「もしかしたら、六歳以降の記憶が全く無いことと、関係があるのかもしれないな」

悠二が一人で呟いていると、布団の中がもぞもぞと動いていることに気付いた。

「うん？何だ？」

「ううーん」

布団の中から女の声が聞こえ、悠二は焦る。

昨日はあれからすぐに寝たのだ。誰も入れた記憶もないし、入られたような記憶もない。

「あれ？もう起きているの？おはよう悠ちゃん」

何故だろう？なぜ由紀姉と一緒に寝ているのだろうか？何が何だかもうわからない。

「うん？どうしたの、悠ちゃん？」

「……」

学園長の恰好は猫の絵柄が入ったパジャマを着ていた。意外と子供っぽい寝間着だなど思ったのだが、そんなことはどうでもよくなかった。なぜなら服の一番上のボタンが外れ、豊かな胸が露わになっていたのだから。悠二はボー然と胸を見ていた。もちろん悠二だって男である、興味がないわけがない。

「ふにゅ？」

学園長は少女のような甘い声を出し、首を傾げていた。普段のスーツ姿とは違い子供っぽい服を着て、少女のような甘い声。

これはヤバい。早くこのピンチを脱出しなければ……。このパターンは何度も経験したことがある。悠二は危機感を覚え始める。

「……悠ちゃんのエッチ」

学園長は悠二の視線に気づいたのか、顔を真っ赤にし、胸を隠すように自分の体を抱くように腕を廻していた。

「いや、これは」

――バーン。

ドアが壊れんばかりの音と共に、濤が躊躇うことなく堂々と入って来る。毎度ながらタイミングの悪い奴だ。

「さあ朝だよ、悠二。起きて、起きて」

「ちっ」

なんだろう、由紀姉から舌打ちした声が聞こえたような気がしたのだが……。気のせいだよな？

「ゆ・う・じ」

悠二と学園長を相互に見た濤は一瞬固まり、頬がひくひくと動いていた。何とも器用なやつである。

「これはだな……」

「あら、おはよう濤さん。でも、あんまり悠ちゃんとのスキンシップを邪魔しないでくれる？」

「さあ、悠二。今すぐ死になさい！」

あれから何とか俺は生還し、気まずい朝食を済まし校舎に向かって歩いているのだが……。

「シルヴィア、離れなさいよ」

「濤が離れたらいいじゃない」

「まあまあ」

「「悠二は黙っていて」」

俺は濤とシルヴィアに両腕を引っ張られていた。その周りでは「

「なんであいつばかり」などの文句などと言う野次たちでいっぱいだった。

「二人とも離してくれないかな？」

「ふう〜ん。悠二は学園長がいいのだ？」

「いや違うよ」

漑の不機嫌オーラ全開に圧倒されながらも否定する。さらにそれが伝染したのか、シルヴィアまで眉を吊り上げ、背中に掛けた鞆に手を添えた。

鳳凰学院の生徒会は、帯剣や武器の常備使用許可を許されているので、別に特に問題はないのだが。銃刀法違反ではないか？という疑問が当然出てくる。漑曰く、生徒会には特別な特権が与えられているらしい。簡単に言うと、鳳凰学院生徒会だということ。帯剣などを国が許している。それだけ、鳳凰学園は日本にとっても特別なのだろう。

「シルヴィア、剣はなしだよ。危ないからね」

「悠二兄ちゃん、漑姉ちゃん、おはよう」

背後からシ紫色の紐で括られたツインテールを揺らしながら、漑が笑顔で駆け寄ってくる。

「おはよう漑」

漑、ナイスなタイミングだ。これでこの最悪の窮地から脱出できる。

「漑、おはよう」

漑の屈託ない純粹の笑顔に、つつい笑顔になってしまう。

「この人はだあれ？」

漑は首を傾げながら、シルヴィアを見ていた。

「ああ、この人は生徒会副会長のシルヴィア・アルフォート。俺の知り合いでもある」

「初めまして、氷身漑こおりみの妹の漑です。いつも姉が迷惑かけています」

「本当に漑の妹さんですか？行儀が良くて可愛い子ですね。私の

ことはシルヴィア姉様と呼んでください」

シルヴィアも雫の笑顔と態度で自然と笑っていた。雫の笑顔は人を和ませる、すごい力を持っているのではないか。

「はい。シルヴィア姉様」

雫とシルヴィアはお互いに笑い合っていた。

「ところでなんでシルヴィアがいるのだ？超能力科の校舎は反対だろう」

「悠君、今頃気が付いたのですか？実は私、今年から魔法科の剣士魔法クラスに編入することになりました」

子供っぽく笑うシルヴィアは、本当に嬉しそうに見える。

「ということは、シルヴィアは魔法も使えるのか？」

「今頃？まあ、ほんの少しかじった程度ですけど、一応は」

「シルヴィア姉様はすごいんですね。魔法に超能力も使えるなんて」

複数の異能を扱えるのは世界でもほんの一握りしかないらしい。特に超能力は天性のものだから、いくら練習しても出来るものではない。だから、シルヴィアや由紀姉は生まれた時から特別なのだ。

「シルヴィア、やっぱり貴女は二年生に編入すべきよ」

「ふふふ、漣。負け惜しみですか？いくらなんでもそれは無理ですよ。なぜなら私はほとんど魔法が使えない。そのため一年から勉強しないといけませんから」

なぜか勝ち誇ったようなシルヴィアに漣は不服そうだった。

「なら、私も一年生になる」

「いや、漣姉ちゃん。無理だよ……だって留年できないもん」

そう、鳳凰学園は留年という制度はない。留年の対象者は退学となるため、生徒は全力で勉学に励み、実技も練習を怠らない。

「うう、ならもう一度ここに入学するわ」

「そしたら、私たちの後輩ね」

「む」

シルヴィアと漣は仲がいいと聞いていたが嘘だったのか？喧嘩し

かしてないように見えるのは俺だけだろうか。

「いつまでも、こんなところで話してないで悠兄ちゃん、教室行こう」

「おいおい、そんなに慌てなくても」

雫は教室に向かって、悠二を引きずるように引つ張っていく。背後から「悠二、待ちなさい」と雫の声が聞こえたが無視しておこう。

悠二と雫はシルヴィアと滯を無視して教室に向かっていた。

「悠兄ちゃん」

「なんだ、雫？」

「ううん、呼んでみただけ。やっぱり、久しぶりに会えて嬉しいなあ」

雫のいいところは無邪気で無垢の笑顔だろう。見ていてとても楽しい気持ちになる。

「まあな、俺も久しぶりに会えて嬉しいよ」

「うう。悠兄ちゃん」

「なあに？」

「にゃい（大）好き」

教室のドアの前で雫は悠二にいきなり抱きついてくる。悠二はクラスメートや周りを通る人たちの視線を感じながら、抱きついてきた雫を必死で離す。

「むう、悠兄ちゃんが私を受け止めてくれない」

「当たり前だろ。こんな人の多いところで」

「人がいなくてもダメです。不純です。不清潔です」

少女は茶髪で三つ編みを左に流し、胸元まで伸ばしていた。少女は、悠二達の前で不機嫌を露わにしている。少女の名前は滝川明日香^{たきがわ あすか}。魔法科のクラス委員長であり、風紀を乱すことをこよなく毛嫌いしている。

「あつ、滝川。おはよう」

「うん、おはよう。それよりも神崎君、あんまり風紀は乱さないようにしてくださいさる？」

ニツコリ笑っているが、明らかに偽っているのが鈍い悠二にもわかった。

「おはよう、明日香ちゃん」

雫は滝川に飛びつくが、それをあっさりと避けてしまう。雫と滝川は幼馴染みであり、小中と同じ学校を卒業している。いわゆる腐れ縁で、とても二人は仲がいい。

「やめなさいって、雫。いい加減にもう抱きついてこないでよ」

「冷たいなあ、明日香ちゃん」

拗ねてそっぽを向く雫に、明日香は呆れた顔をしていた。

「それより、雫。神崎君に抱きつくの、やめなさいよ。不純よ、不潔よ」

「まったく、明日香は純粹なのだから」

「違うわ。ただ、公共の場であんな淫らなことはしちゃダメなの！」

滝川は三つ編みを揺らしながら、悠二を睨んでくる。悠二は何も言い返せず、逃げるように教室に入って行っていった。

「み、皆さあ、席についてくださーい。HRを始めますよ」

悠二が教室に入ると同時に、担任の教師である冬月先生の声が聞こえてくる。それに従い、悠二は窓側で一番後ろの自分の席に着席した。あとから隣に、雫が悠二に笑いかけてから遅れて席に座る。

「皆さん、昨日は無事でしたか？」

誰も冬月先生に返事を返す人はいなく、それがショックだったのか俯いてしまう。さすがにあれば全員が気絶という形で終わったのだ。冬月先生が悪くないことはわかるが、注意も言ってくれなかったことで責めてしまうのだろう。少しの間、沈黙してしまう。

「……ひゃん……うう」

新人教師の模範になるような人だ。冬月先生はオロオロと生徒た

ちを見廻し、助けを求めるような声で呻っている。それから、チラと悠二を見始め、最終的には「助けてください」と訴えた目を向け始めた。

新人教師にはこの状況は辛いのだろうし、收拾のつけ方もわからない様子だ。もしかしてこれは、新人教師いじめではないだろうか？などと考えながら悠二は冬月先生を助けてあげることにした。

「滝川、冬月先生を助けてやれよ」

委員長の滝川の席は悠二の正面であり、今は制服の端を引っ張ってひそひそと話している。そしたら、イライラしているのか不機嫌な顔で見返され、つい悠二は手を引いた。

「先生はアンタを見てるのよ。あんたが助けてあげなさい」

それを言うなり滝川は、ふいっと前に向き返す。

「はあゝ」

「……」

横目で雫を見るが、たぶん気づいているのだろうが無視された。

「冬月先生には彼氏がいるんですか？」

悠二の突拍子のない発言に、クラスの全員が振り向く。滝川は「あんたバカ？」と小声で言っていたが気にしないようにしよう。雫は「ファイト」とガッツポーズを見せてくる。

「ふあい……彼氏ですか？い、いませんよぉ。恥ずかしながら年齢Ⅱ（イコール）彼氏いない歴ですからぁ」

なんとも悲しいことを冬月先生は笑いながら言っていた。本人はそんなに気にしていない様子。この笑顔には悪意なんて微塵も感じられず、子供の様な無邪気な笑顔だった。

「先生、彼氏の一人もいないんですかぁ」

「ええ、可愛いのに勿体無い」

「なんなら、私が彼氏役しようかな」

この魔法クラスの40人の内32人が女性で、悠二を含めた残りの8人が男性。そのため入学式前のHRは、男子は弱く女子高のよくな空気になっていた。悠二の思惑通り、恋愛の話にクラスメート

が食いついていく。

「先生の3サイズは？」

「好きな人とかいるんですか？」

と、次々と冬月先生は質問攻めにあっている。なんとか悠二は、この悪い空気を断ち切ることに成功した。

今はHRが終わり、悠二は魔法学の授業を受けていた。鳳凰学園は普通の教科＋（プラス）、魔法学、魔法薬、実技の3教科を習う。魔法学は魔法の基本知識を学ぶための授業である。

「えー、みなさん知っているとありますが、魔法には属性があります。わかる人？」

3教科は担任が受け持つことになっているので、冬月先生が授業をしている。冬月先生は生徒に目を配らせ答えてくれる人を待っているようだ。

「はい」

「氷身さん」

元氣よく返事をし、手を挙げる雫に冬月先生は嬉しそうに指名する。

「はい。氷と雷と風と土と火に、闇と光と無です」

「はい。そうですね。氷などの8つの属性のことを八大魔法と言いますね。皆さんすでに何種類か使えると思います。この授業ではより魔法のことを知り、間違った使い方しないようにしましょうね。はい、氷身さんありがとう。」

雫は褒められてうれしいのか、悠二に笑いかけてから席に座った。冬月先生は授業の時だけ普通に話せるらしい。

「それでは、魔法を使うために必要な魔力はどこからきているのでしょうか？」

「はい」

「滝川さん。座ったままでいいですよ」

「はい。魔力は魔臓という臓器で作られています」

「そうですね。一般の人たちにもほんの少しなら魔法を使えるこ

とはできます。ですが、私たち魔法使いの魔臓は普通の人とは魔力の生産量や保存量がだいぶ違います。逆に言えば、魔臓が活発に動いている人は魔法使いになることができます」

そのあたりの、ことは一般人でも知っていることだ。一般常識と言っても過言ではないだろう。

「はい、先生質問です」

「はい、なんでしょう？」

冬月先生は質問が嬉しいのか、笑顔で聞き返している。

「魔力に遺伝が関係あるのですか？」

「いい質問ですね。魔力の総量は基本的に変わりませんから、生まれた時から魔力の量は決まっています。最近では、魔力の量に遺伝が大きく関係していることがわかりました。ですが、それは絶対ではありません。人間には絶対ということは存在しません。努力次第で魔力の総量が大幅に増えたという人も現にいます。努力すれば報われるのですよ。皆さんも、頑張ってくださいね」

冬月先生は普段とは違い、きちんと授業を進めていた。

第二話 近づく足音

鳳凰学園の授業は一日に七限あり、そのあとは放課後で部活や自習や自主訓練に励んでいる。悠二のクラスは魔法学のあとは一般科目の授業が行われた。悠二は昼から半分の授業は机に突っ伏し、ずっと寝ていた。雫は心配そうな声で、死んだように動かない悠二の肩を揺らしている。

「……ゆ……悠兄ちゃん、起きてよ。もう放課後だよ」

雫の声でピクリと悠二の体が動き、ようやく顔を上げた。まず悠二の目に付いたのは黒髪のツインテールで、紫色の紐に括られた左右の髪は風で揺れている。まだ春のだからまだ少し寒く、悠二は身震いする。

「ふぁー、よく寝た……寒いけど」

机から顔を上げた悠二は欠伸をしてから、目の前にいる雫に目を向ける。雫は安心したような顔で悠二を見詰めていた。雫はいつまでもじっと寝ている悠二のことで、心配していたのだが……悠二はそんなことに全く気づきもせず返事をする。

「おはよう、雫」

雫は呑気に返事を返す悠二を見返し、大きくため息を吐く。首を傾げる悠二に呆れた声で雫は言う。

「はぁー、まったく動かないから心配したじゃない」

「なあに？ まさか昼からずっと寝ていたの？ 悠二そんなに寝ていたら脳が腐るわよ」

その後ろから一人歩いて来て悠二の前に立ち、長い黒髪が風に揺らしていた。雫を大人にしたような女性、雫の実姉の漣が整然と立っている。いつもはポニーテールにしている髪の毛は括らずに、サラサラな髪を伸ばしていて大人っぽく見える。

「漣？ なんか用か？」

「そうだよ。お姉ちゃん、何しに来たの？」

「そんなに嫌な顔しないでよ……雫」

漣の言った通り雫はどこか不満な顔をしていたが、皆に鈍いと言われる悠二には、なぜ雫がそんな顔をしているのか理解できていない。それを見越してからなのか、漣は苦笑しながらやれやれと首を振り、コホンとわざとらしく咳払いをしていた。

「悠二、今日は生徒会の仕事を教えてあげに来ただけ……だから、そんなに怒らないでよ、雫」

雫はプイッとそっぽを向き、漣は姉とは思えないほど弱々しい声で謝っている。姉としての威厳もなにもあったものじゃない。

「うう、漣姉ちゃんが悠兄ちゃんを盗るよぉ」

「おい、雫。だからって抱きついてくるなよ」

「ちゃつと、雫！ どさくさに紛れて抱きつくなんて……羨ましい」

雫は何を思ったのか悠二の右腕に抱きついて来た。

雫のほんのりとある胸が腕の当たり、悠二は動揺する。女の子特有の柔らかさは、小さくてもわかる。

「悠二、私も抱きつく」

「嫌だ」

「なんでよ？ 雫はいいのに何で私はだめなの！」

「えつと……だな」

雫と違い胸が大きな漣に抱きつかれたら、と悠二は思っているのだが……。そんなことを知らない漣は抱きつこうと迫ってくる。

「漣姉ちゃん！ ダメ！ これは私だけの特権なの」

「ええ、なんで？ ケチケチしないでよ。雫」

雫と漣の言い合いが始まる。仲のいい兄弟なのか、仲の悪い兄弟なのかわからないな。

「悠君、来たよ。愛しのシルヴィアちゃんが」

いきなり現れたシルヴィアが悠二の左腕に抱きついてくる。瞬間^{テレ}移動^{ポート}を使って近づいて来たのだろう。金髪をふわふわと揺らし、雫よりほんの少し膨らみのある胸を悠二の左腕に押し付けてくる。

「なんで！　なんで！　なんで！」

漚はかなり怒ったようで、両手の拳を握りしめて悠二に近寄ってくる。……怖い。と思っけていても、両腕を掴まれている以上悠二に逃げ場はなく、漚に胸倉を掴まれてしまう。

「ふっふ、悠二。何故私はダメなのに二人はいいのかしらね」

不気味に笑う漚に、悠二は腰が抜けそうになりながら言い訳を考える。胸が大きいからと言えば、雫とシルヴィアに怒られるだろう。いくら鈍いと言われている悠二でも簡単に想像ができた。

「えっと……仮にも生徒会長が生徒の前でそんなことしたらダメだろ」

自分でもかなりいいことを言った気がする。

「ふうん。わかったわ……胸ね。二人は小さいけど私だけ違うもののね」

何故わかったのか理由がわからないが、漚は勝ち誇った顔をしている。もちろん言われた二人は顔を赤くして悠二を睨んでくる。

「え？　違うって」

「さっき、私の胸を見たのに？」

「ぐっ」

「さっきから悠二は私の胸ばかり見ていたけど」

漚は言うなりパツと悠二の胸倉から手を離し、自分の胸を強調するように腕を組んで、胸を少し持ち上げるようにした。もちろん悠二も男なので、目の前に推定Dカップがあればつい見てしまうわけ……。

「悠兄ちゃん！」

「悠君の！」

「「ばかあ」」

見事の手と同時刻にビンタが悠二の頬が直撃した。マンガみたいに紅葉模様が頬に出来ているかも……な。

「あっははは」

漚は一人で満足そうに笑い声をあげて笑っていた。

あの後に生徒会ではない雫と玄関で別れ、悠二は屋敷（学園長の家）の部屋に帰って着替えている。と言っても制服の下に防弾チョッキを着込んでいる。右腕にさっき渡された「生徒会長補佐」と書かれた腕章を付け部屋を後にしようとドアを開けると、目の前にはすでに着替えたのか滯とシルヴィアが立っていた。

「よう、待ったか？」

「別に」

さっきのことを根に持っているのか、そっぽを向きながらシルヴィアが返してくる。玄関の道のりまで終始「私の胸は、美乳なのよ！」とずっと言っていた。

見たことはないが、確かにシルヴィアは美乳なのだろう。雫は「成長期が遅いだけ」と沈みながら言い放っていた。これはノーコメントで……。そんなことを考えていた悠二は、考えを振り払うように気になったことを聞いてみた。

「滯、なんで防弾チョッキ着ないといけないのだ？」

「それはね、今日が週に三回ある町の巡回の日だからよ。私と悠二とシルヴィアの三人で、月曜と木曜が見回りの日だから忘れないでね。本当は二人きりがよかったのだけどね」

ポニーテールにした滯は、横目でシルヴィアを見るなりわざとらしく肩を落とす。もちろんそれを見たシルヴィアが黙っているわけもなく。

「私も悠君と二人きりがよかったのに、この悪魔が」

「悪魔って誰よ！私に違うわよ」

確かに滯は悪魔みたいのところがあるとは、口が裂けても悠二には言えない。

「なによ、貧乳」

「なっ！ 違うって言うてるでしょ！これは美乳なのよ」

「どこが美乳なのよ？ふふ、それは負け惜しみ？」

「なによ！歳とったら垂れるのよ、それ！」

「なっ、ないのは女としてどうなのよ！」

二人は悠二の目の前でもお構いなしに先程の続きを始める。

「まあ待て！それより」

「悠君は美乳が好きだよね！」

「悠二は大きい胸が好きよね」

「だから」

「「どっち！」」

今にも殴りかかれそうな勢いで、二人が悠二に詰め寄ってくる。

「えっと……女の子は胸じゃないよ。俺は滯とシルヴィアのこと好きだけどな」

「えっ！」

「……」

なんだろう？なんで二人はそんなに顔を真っ赤にしているのだろうか？

「まあ、さっそく町に行こうよ」

そんなこんなで何とか町に着いた。この鳳凰学園がある人工島の南側には町があり、放課後にはほとんどの学生が集まって活気に満ちている。一部の学生は学園長に許可をもらって、店を開いている人もいるらしい。

両側は洋風のレンガ造りの店が立ち並んでおり、多くの学生が入り込んでいる。学園長は洋風な建物が好きなのか、町はすべてレンガ造りに統一されていた。

「で、なんで巡回なんかしないといけないのだ？」

「簡単に言えば、入学式から少しの間は、学生たちの間に争いがよくあるのよ」

「そうなのだ。面倒くさいな」

「ふっ、言うと思ったわ」

なにが嬉しかったのか、悠二の左を歩く漣が嬉しそうに笑っている。右で歩いているシルヴィアもクスクスと笑っていた。二人ともご機嫌なようだ。

「なんか久しぶりだな。こうして買い物なんて何か月ぶりだろう」

「そうなの？ 私でよかったらいつでも相手してあげるわよ」

「悠君、私がいいと思います。いえ、私と買い物しましょう」

「はいはい。またいつかな」

見渡す限り学生と、なんだか異様な感じに悠二は顔を顰^{しか}める。執行部の連中が通りかかる度に、生徒会長の漣に頭を下げていた。入学式での事があったからか、悠二にはしょうがなく無愛想に頭を下げている。悠二にしたら苦笑するしかない。

「執行部の連中もいるのなら、俺たちはいらないじゃないか？」

「確かに減多なことがない限り必要ないわよ。でも、執行部は生徒会の部下に当たる人達だから、私たちが率先してしないと示しがつかないじゃない」

「そんなもんなのかな」

「そんなものよ」

「ところで、シルヴィアは？」

「え？ ああ、たぶんいつもの所だよ」

漣はいきなり立ち止まり、前方のある店を指さしていた。指した先を見ると、窓の前でしゃがんで覗き込んでいるシルヴィアが見える。

「そういえば、シルヴィアは動物好きだったな」

「ええ、過度の……ね」

「ペットショップか」

「まあ、ほとんどの人が寮に入っているから買えないのだけど、癒しの場所としてあそこに寄っていく人が多いのよ」

漣の言った通りに、店の中にはたくさんの人でごった返していた。

しかし、なぜシルヴィアは中に入ろうとしないのだろう。そのことに漑は気付いたのだろうか、笑いながら教えてくれた。

「あの子、猫アレルギーなのよ。うふふふっ」

思い出し笑いなのだろうか、漑が妙な笑い声を上げていた。不気味と思いつつ、漑には不気味とは悠二には言えなかった。

「はあ、どうする？」

「ほっといていいでしょ。一時間はあんな感じだから」

「そうか。なら見回り続けようか」

一時間もあんなことをしているのか、シルヴィアも可愛い所があるじゃないか。

「ということで、悠二デートしようよ」

「デート？　なんで？　というか巡回は？」

「いいのよ、もう時間だしね」

「そうかい」

漑はニツコリ笑いかけ、悠二の右腕に抱きついてくる。昔はよく二人で遊んでいたからなのか、なんか懐かしく悠二は感じていた。適当に二人で歩いていると、武器や魔法品などの商品を扱っていることに悠二は気付く。店前には大きな両手剣が立て掛けられていた。

「なあ、武器とか売っていいいいのか？」

「別にいいじゃない？」

普通に返してくる漑に対して、悠二は眉を吊り上げる。まあ、漑がいいというなら問題はないだろうと悠二は一人で納得する。

「それより……周りをどうにかしてほしいね」

「あら、そんなこと気にしていたの？」

悠二は苦笑しながら漑を見やると、漑はわざとらしく驚いた顔をする。二人の周りに多くの学生が付いて来て、ざわざわと何かを話している。それを感じながら、悠二は俯き嘆息する。

「それより、シルヴィア一人でもいいのか？」

「やっぱり気づいていたのね。大丈夫よ、あの子は意外とできる

わよ」

シルヴィアの実力は、二年間ほど一緒に住んでいたことのある悠二は知っている。あの時点でも剣の実力は悠二を超えていた。それから三年の月日がたったのだ。超能力という類まれな才能を持ち、生徒会副会長の座に就くのだから大丈夫だろう。

しかし、悠二の顔には不安を拭い切れなかった。もしかしたら二年前のようになるのでは……。

「悲しそうな瞳……私が知らないことが何かあったのね」

核心をついてくる滯に、そんなことを言われるとは思わなかった悠二は立ち止まり、カッと目を見開く。滯は「やっぱりね」と呟き、寂しそうな顔をしていた。

「何があったのか知らないけど、少しはあの子を信頼していいじゃない？」

「そうだな……過剰に反応し過ぎだよな」

悠二は空を見上げ、呟く。

「――シャル」

悠二の掠れた声は、隣を歩く滯にも聞こえなかった。

第三話 赤い髪



「猫、可愛い」

シルヴィアは可愛らしい声を出しながら、店のガラス越しにいる猫を見ていた。

否、シルヴィアはガラスに映る大柄の男を、無表情で品定めするような目つきで睨んでいる。男は黒色のコートを着込んで、左目に眼帯をしている。深くかぶられた帽子からは、赤毛の髪が見える。明らかに怪しい感じがする。気配を消しているためか、周りにいる生徒たちは気付いていないのだ。存在すらわからないのか、誰も見向きもしていない。

「……完璧に気配を消している。やはりプロか」

男はシルヴィアを通り過ぎ、悠二達が歩いて行った方へ向かっていく。生徒で溢れている中、誰とも当たることなく進んでいく。シルヴィアは男を影からつける。

シルヴィアが男に気が付いたのは、昔からの癖である探査行動からである。町に来てから一定の距離でついて来ている男に気づき、誰が目的かを探るために悠二達から離れた。

「おそらく、悠二達も気づいていると思うけど」

誰に言うわけもなく、シルヴィアは小さく呟く。男を尾行していたのだが、男はほとんど町の南に向かっていているようだ。

——もしかしたら、悠二達ではなく違う目的があるのだろうか？悠二達が入った店は既に通り過ぎている。それでも男は迷わずに南に向かって歩いている。

「ぐっ、やはり……二人きりにしたのは間違いだったかな……これじゃあ、二人がデートしているみたいじゃない」

シルヴィアは男にばれない様に壁にもたれ、拳を握りしめる。シ

ルヴィアはすでに南部の端にいて、町を出るとそこには練武場がある。この人工島には、南と西と東の端には練武場が設けられている。この練武場は実践的な戦闘の練習を目的とした場所である。南の練武場は廃ビルなどの建物が建てられている。

男は町と練武場の境にある、背丈くらいの柵を飛び越える。練武する時は担当教師が結界を張って、町には被害が出ないようにしているが、練武以外では誰でも出入りできる。男はさらに廃ビルに向かっていく。

「練武場になんの用だ？」

シルヴィアは眉間にしわを寄せ、応援を呼ぶかを悩む。練武場は真っ暗で、不気味な分息を醸し出している。さすがにこんなところに用などあるはずがない。シルヴィアはポケットから携帯を取り出し、悠二宛てにメールを送る。尾行中なので電話はできない。

「よし……行こうか」

パチンと携帯を閉じ、元の場所のポケットに戻す。もう影しか見えない男を追っていくため、柵を飛び越す。曲がった街灯の光しかなく、視界はかなり悪い。廃ビルや途中で折れた信号など、まるで戦争でもしたような状況だった。これは生徒たちの練習によって壊されたものだが、月に一回は修復のため業者が来る。

鉄格子の柵を越えてから二つ目の交差点で、不意に男は立ち止まった。振り向きシルヴィアが身を隠している廃ビルを、暗くて見えないが男は睨んでいるだろう。明らかに尾行が失敗しているのがわかる。

「ばれているのなら隠れている意味ないわね」

廃ビルからシルヴィアは交差点に出ていく。ここはちょうど練武場の中心地くらいだろう。なら最初から尾行は失敗している。

「私に用？」

男はブツブツと何かを呟いている。召喚の詠唱でもしているのか、随分と長い詠唱をしていた。詠唱が終わったのか、男の前に魔方陣が現れ赤く光る。

魔方阵から二メートルはある銀色の毛をした狼が出現し、揺らめく銀色の毛が月明かりに煌めき、神々しくさえ感じる。血のような赤い眼には、恐ろしささえ感じさせられる。対するシルヴィアは何もしていなかったわけではない。きちんと迎撃するために態勢を整えている。

「……召喚士ね。一筋縄にはいきそうにないわね」

シルヴィアの右手には光り輝く両刃の剣が握られている。愛刀であり、魔法も切り裂くことのできる剣。シルヴィアは剣を中段に構え、相手の様子を覗う。

銀色の毛の狼……銀狼ぎんろうがシルヴィア目掛けて疾走してくる。その速さは尋常ではなく、一気に間合いを詰められ、噛みつこうと涎よだれで煌めく牙を剥き出しに襲ってくる。すぐそこまで来たところでシルヴィアは瞬間移動し、銀狼の背後に廻る。瞬間移動者（テレポーター）の戦法は、背後か視覚に回り込み、相手に的確な攻撃を与える。シルヴィアの横一閃の斬撃に銀狼は的確に反応し、飛び退く。銀狼はすぐさま攻撃に移り、向かっていく。

「くっ、なかなかの召喚獣のようね」

一撃で決める気だったシルヴィアは苦虫を噛み潰したような苦い顔をする。

瞬間移動からの攻撃は一撃必殺。そして、便利な攻撃は必ずリスクを伴う。瞬間移動のリスクは、集中しなければならなかったため時間的にロスが生じてしまう。詠唱中に攻撃しなかったのはそのためだ。瞬間移動者の中には連続で使用できる者もいるらしいが、滅多にいない。この鳳凰学園でも両手で数えられるほどだ。

銀狼は体当たりをするために頭を少し下げ、シルヴィアに走っていく。当たりそうな寸前でそれを瞬間移動で躲し、横に避けながら突きを繰り出す。それも銀狼にあっさりと避けられてしまう。

「なんて、反応速度だ」

シルヴィアは間合いを取るために、瞬間移動を使う。銀狼はすぐさま主である男の元に向かって疾走する。男は街灯のすぐそばに立

っていて、よく観察することができた。召喚している間は、ある一定の範囲から動けないため目立つところに立って、召喚獣に守らせる。

「思ったより、厄介なようだね」

シルヴィアが連続で瞬間移動を使用できるのは三回、そのあとは休憩が必要になる。それ以上は脳に多大な負荷が生じるため、頭痛で動けなくなる。

「……召喚士を攻撃するべきか。うまくいけばそれで終わる」

召喚獣は召喚士からの魔力で、動くことができる。そのため、召喚士が気絶をすれば消えてしまう。

「――『断罪の炎』^{シヤジメントフレイム}」

男の周りに黒くて不気味な炎が現れる。男は掌をシルヴィアに向け、周りの黒炎^{こくえん}を使いピンポン玉くらいの球体を数十個に変えた。断罪の炎は炎系の最上級攻撃魔法。黒炎はすべてを燃やすことができ、形も術者の好きな形に変えることができる。

シルヴィアは額から冷汗が流れていることに気づき、左手で拭い取る。

「……ちよつと、やばいかも」

召喚士は基本的に召喚獣で攻撃をする。その理由は簡単で、召喚するだけでかなりの魔力を持って行かれるし、維持するだけでも大変だからだ。しかし、男は魔法を使用することができた……かなり魔力と技量を持っていることを、シルヴィアは瞬時に理解できた。それと同時に、銀狼の直線的な攻撃は詠唱中の援護ということだともわかる。

黒炎の球がシルヴィアに目掛けて飛んでくる。シルヴィアはそれを愛刀で巧みに切り裂いていく。しかし、膨大な魔力からなる黒炎に輝きが薄まる。いくら魔法が切り裂ける剣でも限界はあり、シルヴィアの愛刀は輝きを失っていく……限界が近いのだ。

男は次から次へと黒炎を容赦なくシルヴィアに放っていく。

「くっ、限界か……」

魔法を切り裂くのは諦め、瞬間移動で廃ビルの中に逃げ込む。黒炎によってシルヴィアの後ろにあった信号機が燃えて、跡形もなく塵になった。

「最上級魔法か……まったく恐ろしい魔法——っ！」

廃ビルに逃げ込んだシルヴィアは、銀狼に体当たりされ後方に飛ばされる。シルヴィアはとっさに愛刀で防ぎ、地面に当たる前に受け身を取ったから擦り傷を負った程度で済んだ。

「なんて嗅覚！　いくら範囲が限定されるとはいえ、こんなにも早くにばれるなんて！」

苦痛めいた声で喘ぐが、銀狼は容赦なく相打ちを仕掛けてくる。態勢が整えられていないシルヴィアに、牙を剥き出しにした銀狼が迫っていく。態勢が悪いままに横に斬撃を繰り出すが、銀狼は簡単に飛び越えられて避けられてしまう。

「炎の精霊よ、十六本の矢となり、我が敵を撃ち抜かん」フレイムアロー『炎の矢』

しかし、それはシルヴィアの作戦だった。いくら銀狼とはいえ、空中で避けられるはずがない。十六本の炎の矢は、危険と察知したのか銀狼は体を捻るが、六本の魔法の矢が見事当たる。

「……ガウ！」

炎の矢に当たった銀狼は後方に弾き飛ばされ、苦痛の声が廃ビル内に響く。

「ハアハア、やったの？」

剣を杖代わりにシルヴィアは立ち上がり、銀狼を見下ろす。下級魔法とはいえ、もろに当たったのだから無事では済まない。銀色の毛を赤く染めてはいるが、銀狼の気力は衰えることなく立ち上がる。先程には感じられなかった殺気が目には籠められていた。今まで使ってたこなかった鋭利な爪を尖らせ、大きく口を開け、シルヴィアに牙を見せつける。

「あれ？　もしかして怒らせちゃったかな」

「ガウ」

返事をするかのように銀狼が吠える。直後にシルヴィアに疾走し、爪で切り裂かんとしていた。速さは先程以上で、気が付きたら目の前に迫っている。間に合わない。

――殺される。

そうシルヴィアが思い、とっさに目を閉じる。しかし、いつまで待っても痛みは来なかった。そっと、目を開けるとそこには、横たわっている銀狼の姿がある。遠く後ろから声がし、振り返るとそこにはさっき別れた悠二が立っていた。

「よかった、無事か？」

悠二は一瞬でシルヴィアの隣に現れた。悠二は瞬動術を使い、間合い詰めたのだがシルヴィアからしたら突然現れたように見えるだろう。瞬動術とは一瞬で近距離を移動する術の事で、平たく言えば直線的な瞬間移動になる。もちろん物体をすり抜けたりはできない。

「え？ うん」

シルヴィアの体が震え始めて止まらない、先程の事で無意識的に死という恐怖に怯えているのだ。愛刀もカチャカチャと音を出している。まだすべてが終わっていないのに、脱力したようにシルヴィアは地面に座り込んでしまう。

「悪い、来るのが遅れた」

優しい声で謝りながら悠二は、シルヴィアを後ろから抱きしめる。いきなりの事で驚いたシルヴィアはビクツと体を震わせたが、次第に震えは止まっていく。

「『稲妻の剣』
ライトニングソード」

――ドゴーン

銀狼に向かって雷で作られた剣放つが、寸前で銀狼が身を起こし避けてしまう。避けられた剣は壁にぶつかり爆発音を起こす。

――ド、ドゴーン。

銀狼はそのままどこかに走って行ってしまう。おそらく、主である男の場所に向かったのだろう。

――ガ、ガ、ガガガガ。

廃ビルの外から何かが刺さるような音が中まで聞こえてくる。シルヴィアは名残惜しいが、悠二の腕を離し立ち上がり窓から下を覗き込む。シルヴィアがいるのは先程いた交差点よりほんの少し離れた場所。瞬間移動は目の見える範囲しか移動できない。しかし、見える範囲ならいかに堅牢な場所でも移動できる。

「漣が戦っている」

シルヴィアの隣に悠二が立ちあがり教えてくれる。



漣は練武場に入るなり悠二にシルヴィアを任せ、自分は黒のコート姿をした男と対峙していた。男は腹部を押さえながら漣を睨んでくる。漣は男の腹部を見るなり誰の仕業かをすぐに理解し、悪魔的な微笑を見せつけ皮肉そうに言う。

「あらあら、痛そうね。治してあげようか？」

それに男はビクツと反応し、腹部に刺さったナイフを左手で無理やり引き抜く。血がたらたらとコートを伝いアスファルトに滴る。ナイフには男の血がベツタリと付いていて、月明かりにナイフがキラツと輝く。さすがの漣も、嫌そうにその光景を眺める。一瞬の油断も許さない相手だと本能的に感じているのだ……こいつは危険だと。

お互い相手の様子を覗い、薄暗い交差点に沈黙が訪れる。

——ド、ドゴーン。

均衡を破ったのは爆破音で、コートの男はすぐさまに左手でナイフを投げてくる。赤黒い血の付いたナイフは、漣の魔法で作り上げられた氷の盾によって遮られる。漣は盾でナイフを止めるなり詠唱を始める。

「氷の精霊よ、鋼をも貫く氷の槍となり、嵐のように降り注げ『千の氷槍』」

男の頭上に数十の魔方陣が現れ、一メートルある氷槍は千に達す

るほどの数で男を一気に襲う。豆腐に刺すかのように、簡単にアスファルトに突き刺さる。あたりはハリセンボンの如く槍だらけになった。水系の上級魔法の一つで、滯のお気に入りの魔法でもある。

「ちっ、逃げられちゃった」

男は横から現れた何かに乗って、暗い海に消えた。シルヴィアが戦っていた銀狼が男を乗せて連れて行ったのだが、滯はまだ知らない。

「また、派手な魔法使うな」

シルヴィアをお姫様抱っこした悠二が、何もなかったかのように廃ビルから出てくる。お姫様抱っこされたシルヴィアは、顔を完熟したリングのように真っ赤にし、満更でもなさそうに俯いている。その光景を見るなり滯は、頬を引き攣らせながら眉をヒクヒクと上下させる。

悠二の背にはシルヴィアの剣が収められている鞆を背負っていた。別にそんなことはどうでもいい。何が滯をここまで不機嫌にさせているのは……時折見せるシルヴィアの勝ち誇った顔だった。「ふふ、いいだろう」と言っているようなシルヴィアの顔に、滯は腸が煮えくり返る想いになり、わなわなと体を震わす。

「悠二、なぜシルヴィアをお姫様抱っこしているの？」

「うん？　なぜって怪我しているからに決まっているだろう」

「ふうくん、でもかすり傷程度にしか私からは見えないんだけどな」

「シルヴィアが足を捻ったらしくてな」

悠二は困ったような顔をしながら、事の経緯を滯に話す。二人は廃ビルの二階にいて、外に出ようと階段を下りている途中に、戦闘で疲れ果てていたシルヴィアが足を踏み外し捻ったのだ。悠二はなんの躊躇いもなく剣を受け取り、シルヴィアをお姫様抱っこして廃ビルから出て今に至るといふ。

「そ、そう、なら仕方がないわね」

滯は事の経緯を知っても納得がいかなかった。そこは学園最強ク

ラスの滯も一人の女の子で、一度くらい好きな人にお姫様抱っこされたいと思う。目の前で自分の好きな人とイチャイチャされ、自分のされたいことをされるといいう屈辱を受ける。これには滯も黙ってられない。

「ふふふふ、シルヴィア降りなさい」

「いや」

「あらそう」

「なら強制的に降ろしてあげるね」

不敵な笑いを二人に見せつけ、滯はおもむろに詠唱を唱え始める。

「ちよつと、落ち着けよ滯」

「そ、そうだよ。冷静になろうよ」

「うるさい——『千の氷槍』」

第三話 現れた影（上編）



悠二達が第三練武場で赤い男に襲われて一週間が経つ。このことで寮の門限が八時になり、夜間に外出するときは複数人であるように担任の先生である冬月先生から聞いた。事件発生以来、生徒達からの質問や抗議が殺到し、生徒会の仕事は猫の手も借りたい状況になっていた。もちろん生徒会役員の一人でもある悠二も例外なく雑務をこなす日々が続いている。

「だるい、ああ、だるい」

一週間たった今でも生徒会は忙しく、毎日雑務に励んでいた悠二はあまり寝ていない。あの事件の翌日は念のために休校になったが、今では普段通りに授業が行われている。事件から一週間が経ち、少しは平穏な日常に戻りつつある。

昼休みの時間。悠二は自分の机に突っ伏していた。

「どうやって侵入したのか……わからないな……」

鳳凰学園は軍の施設にも引けを取らない警備体制を整えていて、要塞学園とも呼ばれるほど堅牢である。

学園は常に結界が張られていて、破らないと外からの侵入はできない。もし破ったとしても、すぐに屈強な教師陣にばれ、簡単に捕まってしまうだろう。

さらに港には検問所があり、IDが組み込まれた許可証がなければ警備員に逮捕される。悠二たち生徒は生徒手帳に付いて、教師や店のおばちゃんなど学園に関係するすべての人がID付の許可証を携帯している。不審者は侵入していない……いやできないだろう。となれば必然的に内部の人間……学園の誰かがしたことに……

「――もう！ 悠兄ちゃん、次は実技授業だよ」

声と同時に悠二の体が左右に揺さぶられる。雫が制服の上に黒色のロングコートを羽織った姿で悠二を見下ろしていた。顔を見る限り少し不機嫌なようだ。

雫が着ているロングコートは特殊な技法で出来ており、魔法でのダメージを和らげるように作られたものである。実技授業はこれを羽織らなければならないようになっている。

実技授業とは名ばかりでほとんど戦闘訓練みたいなものらしい。

「アンタ起きなさいよ。この変態バカ」

「……俺はいつから変態バカになったんだよ」

雫の隣に明日香が立っていて、汚物を見ているような目で悠二を見下している。なぜか明日香は悠二に敵対心剥き出しで接してくる。

「フン！ 女の子二人に挟まれてニヤニヤしながら登校って何様よ！ この不潔バカ！」

悠二は今日も滯とシルヴィアに挟まれて登校してきたのだが、どこかで明日香に見られていたらしい。

明日香は顰め面のままプイッとそっぽを向くと、左に流した茶髪の三つ編みも微かに揺れる。明日香もすでにロングコートを羽織っていて、準備は万全のようだ。

黙っていれば十分可愛いのに……。

「なにジロジロと胸を見てんのよ！」

悠二の視線が気になったのか、明日香は恥ずかしそうに頬を赤く染めて、隠すように胸を両手で抱きしめる。その姿が妙に色っぽく、つい悠二は言い返す言葉が弱々しくなった。

「……見てない」

「……」

悠二の背中に刺すような視線を雫は向けたまま、無言で突っ立っている。

雫の無言が怖い。

「うふっ。悠兄ちゃん、早くしないと遅刻しちゃうよ」

雫はニツコリと悠二に笑いかけているつもりなのだろうが、むしろ

ろ眉が引き攣っていて近づきがたいオーラを放っていた。

「わ、わかった」

悠二は恐る恐る立ち上がり、席の後ろにあるロッカーからカバンを取り出し、ロングコートを引っ張り出し素早く羽織る。普通のコートより少し重いが、どうしても気になるほど重くもない。

「はあゝ」

「ため息ばかりしていると、幸せ逃げるわよ。変態」

「いちいち変態をつけるな」

「なによ！ さっきジロジロと私の胸を見てたくせに」

「見てないわ！」

「まあまあ二人とも仲良くしてよ、ね」

なぜか知らないが明日香は何かと悠二にちょっかいを掛けてきていた。以前そのことについて悠二が聞いたら「雫に変なことしないように見張っているのよ」と返され、悠二としてはため息を吐くことしかできなかった。ほとんど雫から話し掛けられているのだから、悠二としてはどうしようもない。

「ほら早くいかないよ」

「雫、そんなに引っ張らなくても大丈夫だよ」

「あ、雫！ 変態に触らない！ 変態菌がうつるよ」

「変態菌って……小学生の口喧嘩じゃないんだからやめろよな」

「むうゝ、うるさい」

雫が強引に悠二の左手で引っ張っていくと、明日香が手を離せと悠二の背中に蹴りを入れてきた。

「イタッ！ 俺は何もしてないだろ明日香」

「今私の事バカにしただろう！ それに気安く呼び捨てにするな！ この変態」

悠二達三人は実技授業としても使う運動場に来ていた。運動場の

大きさは驚くほど大きく、悠二は見た瞬間に顰め面になる。東京ドームが四つ入るそうだ。

「そういえばなぜ日本人は東京ドームと比べたがるのだろうか？」

「ああ、やっぱりだるい」

「もう、悠兄ちゃん」

「だってこの広さ、無駄だろ」

しかめ面の悠二は運動場を見渡し、落胆したように肩を落とした。

「それに対しては賛成する。この変態」

「はあ、もう勝手にしろ」

悠二はわざとらしく溜息を吐く。校舎近くにすでに一年の生徒が立ち並んでいた。基本的に実技授業は学年ごとで受けるようになっていて、悠二の魔法クラス以外のクラスも来ている。

まだ先生たちは居ないため悠二達はのんびりと列に入っていた。特に並び順は関係ないらしく、悠二のクラスメートが知らない人と話していたりする。

「悠君、おはよう」

「いや、朝にも会っているからなシルヴィア。それに昼だから、おはようじゃないから」

シルヴィアがロングコートに剣を背負っている恰好で、悠二に話しかける。悠二を見付けるなりシルヴィアが割り込んで隣に来たのだ。そんなことも知らない悠二は周りを見渡す。実技授業には全生徒に武器の使用を許されて、生徒によっては分厚い本（魔法書）や札（護符）を持っている生徒もいる。

悠二の前に明日香が並び、その隣に雫が楽しそうに話している。

「おはよう、シルヴィア姉様」

「ええ、おはよう雫」

「おはようございます。私は雫の親友で、滝川明日香と申します。副会長」

「そんな丁寧な敬語じゃなくてもいいのに……。シルヴィア・アルフォートです。今後ともよろしく」

悠二の担任教師である冬月が、いつの間にか生徒たちの前に立っていた。ほかの教師たちも冬月の後ろで並んでいる。

「すううゝ、ふうううゝ」

「皆さあーん、静かにしてください。今日から
実技授業の担当主任を務めさせていただきます。冬月みちゆき……美雪で
す」

「先生噛み過ぎじゃない？」 「大丈夫かよ」などと生徒たちのヒソヒソ話が辺りを覆っていく。耐え切れなくなったのか、冬月先生はきよろきよろと誰を探す仕草をしていた。

明日香が後ろに向き、悠二に厭味つたらしく小声で言い放つ。

「出してない！」

「……このバカ」

悠二達は多くの生徒たちと教師から注目される。ロングコートの裾を引っ張られていることに気づいた悠二が振り返ると、いつからいたのか茜が困った顔をして俯きていた。

冬月は涙目になり豊満な胸に視線を落としてしまう。

「先生、もえええええええええええええええ！」

と、ごつい男の狂ったように叫ぶ声が響く。もちろん周りの生徒は離れていき、ぽっかりと空間が生まれる。

「ほら、アンタが大きい声出すから先生泣いちゃいそうよ」

「そもそも明日香が変なこと言わなかったら、こんなことにはならなかったじゃねーか」

「あつ、私の所為にしないでよ。変態」

「だから変態じゃあないって」

そんな声を見無視し、悠二と明日香が口論していると、スーツを着たすらっとした男が目の前に現れる。赤いフレームのメガネを掛けたすらっとした体格の男が、困り顔で悠二を見下す。身長は悠二よりと高く190cmを超えている。そのため170cmしかない悠二は面倒そうに見上げた。

「神崎いゝ。冬月先生を泣かすなよなあ」

「はあ森野先生……背が高すぎですよ。首が痛いです」

魔法剣士クラスの担任の森野一もりのはじめが悠二に眉をひそめながら話かけてくる。あの事件以降に知り合い、よく悠二に話しかけていた。

「お前が低いんだよ。それよりもな、滝川とイチヤイチヤするのはいいが、時と場所を考えろよな」

「「「なっ」」」

明日香を筆頭に雫とシルヴィアが驚く声を上げる。それよりも背が低いのを気にしていた悠二はしかめ面になり、森野を睨む。長い黒髪を後ろにまとめた髪を、森野はわざとらしく左右に首を振って揺らす。

「あと、冬月先生の方を頼むな」

「なんで俺が？ 森野先生が助ければいいだろう？」

「いやな、どうも俺は嫌われてるようなんだよ。これが」

森野は肩を上げ、困った顔をする。森野は悠二から視線を外し、後ろにいる茜をチラ見しニッコリと笑う。茜は鋭い眼差しで見つめ返していた。

なんだ？ 森野と茜は顔見知りなのか？

「じゃーな」

森野は身を翻し、教師陣が集まっているところに向かう。森野の翻

し際にニヤツとにやけ顔を、悠二は見逃さなかった。
(得体のしれない奴だ……)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3458p/>

鳳凰学院

2011年10月1日14時38分発行